

## コールファツカン砦と町跡の発掘調査概要

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2017-10-03<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者:<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/2297/9808">http://hdl.handle.net/2297/9808</a>               |

# コールファッカン砦と町跡の発掘調査概要

佐々木達夫 佐々木花江

アラブ首長国連邦のオマーン湾岸の港町、コールファッカン遺跡の発掘調査を2008年1月に終了した。遺構図面整理や出土品研究はこれからとなるため、調査概要を報告する。

## 第1章 地勢、研究史、歴史的背景

### 1. オマーン湾岸バティナ地域の地勢

アラビア半島でオマーン湾岸に面している国はアラブ首長国連邦とオマーン王国である。アラブ首長国連邦内では、シャルジャ首長国、フジェイラ首長国がオマーン湾岸の海岸線を領地としている。シャルジャ首長国に属するオマーン湾の海岸で遺跡調査を実施した町は、北からディバDibba、ルリーヤLuluyah、コールファッカンKhorfakkan、カルバKalba、コールカルバKhorkalbaである。フジェイラ首長国の主要な町は、ディバの一部とカルバの北に位置するフジェイラFujairahであり、いずれも遺跡調査を行った。コールカルバ付近一帯はマングローブの茂る低湿地サバハSabkhaが広がり、海岸部に遺跡はない。

オマーン湾岸に沿ってハジャル山脈が南北に連なり、北端のホルムズ海峡付近では切り立つ崖を形成し平野がほとんどなく、最近まで山の民シーフ族Shihuhが住んでいた。ハジャル山脈の西側は広大な砂漠が広がり、西北側はペルシア湾（アラビア湾）に面する。オマーン湾側は狭い海岸平野を形成し、農地として利用されている。南側ほど海岸平野は広がり、農地面積は広がる。ハジャル山脈から涸川ワディが東側の海へ注ぎ、それは山越えの東西内陸交通路として利用され、山脈裾部のオアシスを結ぶ南北内陸交通路、さらに砂漠交通路を越えてペルシア湾岸に達する交通路に通じている。

オマーン湾岸の気候は、ペルシア湾側と比較するとわずかだが穏やかである。そのため様々な種類の植物栽培がペルシア湾側よりも可能となる。夏は高温となり降雨がないため植物栽培による収穫はできないが、冬は最高気温が30度前後まで下がり、少量であるが降雨もある。僅かな降雨を利用した冬雨天

水農耕が山地頂部や山斜面の一部を農地として行われていた。岩山を登ると、鞍部に石積み囲いの小さな農地が段々畑として今も残る。海岸平野では山裾の湧水を利用した灌漑農耕が行われていた。現在、ペルシア湾岸のアブダビやドバイよりもオマーン湾岸のコールファッカンやフジェイラは夏10度ほど、冬5度ほど最高気温の低いときが一般的となり、山脈の東西で気温差が大きい。

沿岸地域では漁労が盛んであり、Shashabと呼ばれる椰子の木で作った舟が20世紀後半まで使用されていた。現在でも沿岸部でエンジン付き船で地引網が盛んに利用され、自然のクリーク（内陸部に川のように長く入り込んだ入り江）は漁船の停泊地・港として利用されている。山羊や羊、鶏、ラクダも飼われている。

以前は道路が整備されていなかったため、沿岸の町を結ぶ交通は小舟を利用することがあった。ディバより北方の海岸には今でも車が通れる道路が通じていない。南からディバに北上した道は断崖と海に面して途絶える。ディバとコールファッカンを結ぶ海岸の道路も20世紀後半にできたが、それ以前は山脈内を通る内陸路が利用されていた。こうした海岸道路のない地域間の往来は小舟交通が一般的だったと言われる。

アラビア半島オマーン湾岸地域は近隣の町ばかりでなく、海上交通路でインド洋各地の港とも結ばれていた。ペルシア湾沿岸アラビア半島やメソポタミア、イラン、オマーン湾岸のイラン、パキスタン、アラビア海沿岸のパキスタンからインド西側、アラビア半島沿岸から東アフリカ沿岸にかけての地域との強い結びつきが各時代にわたってあったと言われている。18世紀から20世紀前半に首長が居住した砦Fortは修復保存され歴史的観光資源として公開されることが多くなったが、修復され公開された砦には屋根材として東アフリカのザンジバルから木材が輸入され、長持のように大きな衣類・財宝を入れたインド製木製家具が室内に置かれている。それらはイ

インド洋交易や交通の範囲の一端を語る。一般の民家では現地の棗椰子やマングローブを木材として利用し、インド製木製家具は高価なため使用しなかったという。遺跡から発見される陶磁器の産地からもこうした広域交易圏の状態が推測できる。

オマーン湾岸の港町と内陸の町を結ぶ陸上交通路は東西に走るワディ交通路が利用された。最近まで一般的であった数本の代表的な東西陸上交通路を北から順に挙げると、1) ディバ〜カット〜ラッセルカイマ路、2) カルバ・フジェイラ〜マサフィ〜マナーマ〜シャルジャ・ドゥバイ路、3) ソハール〜ブレイミー（アライン）〜アブダビ路となる。ペルシア（アラビア）湾岸とオマーン湾岸には途切れる部分もある沿岸道路が走り、ハジャール山脈西側山裾部と砂漠の接する地域には南北の山裾内陸路が走り、その中央部にブレイミー（アライン）のオアシス都市が位置する。こうした交通路は先史時代の類似遺構・遺物の発見状態から、イスラーム時代以前から長期にわたって利用されていたことが推測できる。地形や気候、その他疫病や戦争、災害といった大きな変化がなければ、交通路と村落の位置は基本的には移動しなかったと推定できる。先史時代の墓や遺跡の発掘によって同じ場所が長期に渡り居住されたことが判明している。この地域は岩山と砂漠がほとんどを占める厳しい荒れた地勢であるため、最近の新道路建設に伴う岩山を削る土木工事のような例を除けば、自然発生的で自然地形に大きく影響された交通路を人為的に変えることは難しいことであった。

筆者が調査の主要対象地としている地域の北側部はディバ、南側部はコールカルバである。ディバより北は不毛な岩山が連なり平地がほとんどないムサンダム半島になる。ムサンダム半島には陸地では交通路が繋がらないが、海岸部は複雑な入り江の奥にいくつもの漁港町がある。陸地で交通できるという点ではディバがオマーン湾岸のもっとも北に位置する町、港になる。暗礁や海賊が多かったと言われるホルムズ海峡を船で通過しない場合は、ディバから山越えてラッセルカイマのジュルファール遺跡方面に通じるのがアラビア半島東北部の最北の陸上交通路となる。ディバからオマーン湾岸に沿って南に向かう陸路は利用されることが少なかったと言われる。ワディが小さな峡谷を刻み、海岸線は砂地がなく岩が絶壁となる部分があり、沿岸道路の発達あるいは車が通れる道路開通が20世紀後半まで遅れたた

めである。海岸から離れた岩山内の陸上交通路は山脈内のワディを縫うようにして曲がりながらも南のコールカルバ方面に通じている。

こうした交通事情から、オマーン湾岸からペルシア湾側のラッセルカイマあるいはジュルファール遺跡に達するには陸路、すなわち山道とワディを利用するのが距離的にも時間的にも最短となり、実際に用いられた交通路であった。ディバとラッセルカイマの距離は地図上を直線で計ると30kmほどである。ホルムズ海峡を挟んで位置するディバとラッセルカイマあるいはジュルファール遺跡は、ペルシア湾とオマーン湾というそれぞれの地勢・地域の先端地という地理的位置の共通性だけでなく、歴史的に深い関連性があることが容易に想像できる。

また、調査地域の南側部に位置するフジェイラやカルバから西に山脈を越える陸上交通路は次のようである。オマーン湾岸の港町カルバKalbaからワディハムWadi Hamに沿ってハジャール山脈Hajar Mountainsを越え、内陸で湧水の採取地として今も知られるマサフィMasafi、ワジジWadi Siji、マナーマManamahを経て、デドDaydの平原を通り、さらに西に砂漠を経てペルシア湾に達する。マナーマまでは岩山の間を縫うようにして行くが、マナーマは平原と岩山の接する中間地帯となる。山裾の湧水と灌漑による内陸農耕の中心地がデドで農園が広がるが、それからペルシア湾岸までは起伏に富む広大な砂丘が波打つ砂漠が続いている。ラクダでこの砂漠を越えるには1日ないし2日の行程であったが、現在は砂の海の中に1本走る高速道路を利用すると1時間で抜けることができる。

ハジャール山脈は涸川ワディが急峻な谷を連続的に刻み、山から流れ落ちた大小の石が涸川に堆積しており、土地は植物が育つにはあまりに痩せている。降雨時には涸川を激しい勢いの濁流が石を巻き込んで瞬時に流れていくという。生業は山羊の放牧、斜面に石垣で囲った段々畑で作る小麦や野菜の栽培、涸川の一段高い部分に石垣をめぐらして作るナツメヤシや果物樹の栽培である。段々畑では冬の降雨期に灌漑水路で水を引き作物を作る。山並み頂上部における冬雨天水農耕が主であった。20世紀第4四半期になると山中でこのような農業は非常に少なくなり、山奥に放棄された農地跡と村跡が残るのは現在とくに珍しいことではない。集落（村、町）を作るというより、1軒から数軒の家があるという場所が

多く見られ、山の頂や周囲よりやや高い位置に住居を造る。冬雨天水農耕は季節的居住移動を引き起こし、夏は山裾に村ごと下る季節的移住が最近まで行われていた。

そこでは一時に過ぎない水の流れを巧みに利用して灌漑農耕していたという。今も人々が居住し農地を確保しやすいのは、山裾と海岸平野である。居住する村は涸川に沿う段丘上に位置して平野を望む場所や、涸川の濁流に襲われない地形の場所が選ばれている。村内や周囲にナツメヤシ畑が広がる地域もある。水を確保する方法は他の地域と類似しており、涸川に掘られた井戸の水が利用されている。カルバの山際地域のように、地下水道ファラージュ (Falaj、複数形 Af1aj) が涸川に沿って作られた地域もあり、涸川出口部に村が発達する。一般には泉や井戸も利用され、涸川の水が流れ込むように作られた地下貯水地の跡も村ごとに残るようである。

## 2. オマーン湾岸のイスラーム時代遺跡研究史の概要

### 〔調査前史〕

アラビア半島沿岸のイスラーム時代遺跡に関する調査と研究は他の地域や時代と比べて少ない。20世紀後半からわずかな先史時代の遺跡の調査が始まったが、その後も欧米人による先史時代の調査が主に続けられ、イスラーム時代に関心を示す研究者はきわめて少なかった。オマーン湾岸を考古学者が訪れたのは1959年であり、デンマーク考古学調査隊がアラビア湾岸ラッセルカイマとオマーン湾岸ディバ Diba を訪ねたのがそれであるが [Bibby 1965, 66 pp.151-152]、イスラーム時代にはまだ関心が払われなかった。1968年にはデンマーク考古学調査隊 K. Frifelt が シャルジャ 首長 Sheikh Khaled bin Mohammad al Qasimi が自らムレイハで表面採集した数片の施釉陶器を見たという [Frifelt 1969]。

### 〔第1期の調査・遺跡の発見と遺物の表面採集〕

オマーン湾岸を含む地域の考古学調査が始められたのは1968年2月であった。イギリス人ビアトリス・ドゥ・カルディ Beatrice de Cardi と D.B.Doe は当時イギリス領であった現在のラッセルカイマ首長国、フジェイラ首長国を中心とする地域の遺跡踏査を行った。当時の道路状況は悪く四輪駆動車でも砂地を走るのは困難な踏査であり、車の走れない地域はラクダの背に乗って移動したという。ホルムズ海峡に突き出るムサンダム半島西側ペルシア湾沿岸 (Ash

Sham, Rams, Wadi Haqil, Julfar, Khashm Nadir, Khawran) と東側オマーン湾沿岸 (Dibba, Khawr Fakkan, Qurayyah, Kalba, Sohar)、および内陸 (Buraimi, Mleiha) で数十の遺跡を発見し表面で遺物を採集している。4週間踏査成果の最初の報告は1970年に刊行され [De Cardi & Doe, 1970]、遺跡と遺物を含む詳細な踏査の成果は翌年に発表された [De Cardi, 1971]。

土器や彩文土器がもっとも多かったが、目立つ採集遺物に中国の染付があった。明代16世紀後半の製品と推定されたため、ポルトガルのペルシア湾岸及びインド洋の支配と遺跡の歴史を関連させた史的枠組のなかで説明がなされた。オマーン湾沿岸の遺跡は、カルバ Kalba からコールフアッカフ Khawr Fakkan の北までの地域が政治的・地理的な理由で主に調査され、バティナ海岸のこの地域では中国陶磁器の採集が非常に少なく、ポルトガル到来以前にインドとの貿易で繁栄していたと推定されるカルバ Kalba、コールフアッカフ Khawr Fakkan、ディバ Dibba でも、わずかな中国染付が採集されたに過ぎない。この理由として、ポルトガルが完全に港や街を破壊したため、中国陶磁器を使用した住民がいなかったことをあげ、一方でジュルファールは真珠生産地であったために、この悲運をまぬがれたとドゥ・カルディは推測している。

この頃英国人 Wilkinson がイラン、アラビア半島とくにオマーンや当該地域隣接地で活躍している。

### 〔第2期の調査・ソハール遺跡の発掘調査〕

オマーン国ソハールの海岸に建つ城塞内の空き地が1980年代にフランス人モニク・ケルブランによって発掘された。イスラーム時代の遺構が残ること、発掘によって中国の青磁や染付などを含む遺物が出土することが明らかになった。出土した中国陶磁器はピアゾリッツによって簡略であるが報告され、13～14世紀の青磁が含まれることがわかった。海岸砂地に深く掘られたトレンチ内下層からは緑釉陶器が出土し、前1世紀頃と推定されたが [Kervran & Hiebert 1991] が、紀元後1世紀と修正された [Kervran 1996]。しかしハレイラ島出土品と類似の緑釉陶器碗が出土しているから、さらに時代が下がる可能性がある」と筆者は推定している。こうした調査によって、オマーン湾岸の紀元後の港町跡の存在が確認できた。

### 〔第3期の調査・フジェイラ国内の調査〕

1987年から1994年に実施されたスイス人コルブッド P. Corboud によるビスナ及びその付近の遺跡踏査

によって数百の遺跡が発見され、ドウ・カルディの調査による遺跡数をすっかり書き替えることになった。一部の遺跡は試掘された。筆者は彼らの表面採集土器等を整理中に観察したが、その中にイスラーム陶器は含まれていなかった。これは、彼らの専門分野が先史考古学であったため、イスラーム陶器を採集しなかったことによる。イスラーム時代遺跡についての知見はこの分布調査によって増加しなかったが、筆者も1987年に同じ地域で遺跡を探しており、ビスナでイスラーム時代の陶器が遺跡に落ちているのを見ていた。

〔第4期の調査・シャルジャ国内カルバ、フジェイラ国内フジェイラ、ビドゥヤの調査〕

1993年に開始されたイギリス人カール・フィリップスによるカルバの発掘調査によって、先史時代の墓が発見された。幅広い潤川内の大小の石が堆積する平坦面に、地表から墓群の存在が推定できるものもある。この調査によってアラブ首長国連邦内のオマーン湾岸遺跡が発掘されたことになる。近くのカルバの農園内では12世紀頃のステラヒアト数片がカール・フィリップスやシャルジャ博物館のイッサによって採集され、イスラーム陶器も無視されていたわけではない。しかし、陶器片が採集されても住居などの存在すなわち遺跡は不明であった。農園内の遺跡は掘り起こされ、あるいは土壌改良で埋められ、地表面からわかるイスラーム時代遺跡はなかった。

フジェイラ砦の修復工事が1990年代末に進み、オーストラリアのシドニー大学チームにより砦内にトレンチが入れられ、採集された炭片が年代測定された。その結果砦は17世紀頃まで遡るといふ説が生まれた。この地域最古という伝承があるビドゥヤモスクの外壁際にもシドニー大学チームがトレンチを入れ、数十点の陶器片が出土し、出土した炭片が年代測定された。16世紀にさかのぼるといふ説が広がったが、18世紀だろうといふ考えは研究者の間で支持されている。モスクは山際の平坦地にあるが、裏山には砦が築かれ、砦のある山斜面で住居が発掘された。これらの調査は小規模であり、観光開発のために復元されたが、発掘報告書は刊行されていない。

〔第5期の調査・シャルジャ及びフジェイラ国内の調査〕

日本人佐々木によるシャルジャ首長国内の考古学調査は、1994年3月に現地調査が始められた。調査目

的は、オマーン湾岸のイスラーム時代の港湾都市遺跡を発見することであった。私たちはペルシア湾岸の調査を1987年から開始し、14世紀後半から16世紀にかけての港湾都市遺跡ジュルファール等を発掘した。多くの貿易品が出土し、この地域の14世紀後半以降の研究資料を入手した。関連調査としてホルムズ海峡からペルシア湾を出てオマーン湾岸の遺跡を調査することが必要となっていた。ペルシア湾岸とオマーン湾岸では出土品の様相が違う可能性もあり、それは風向きの違いによる海域世界の違い、ポルトガルなどの海域支配のありかたと関係していることも予想された。また、10世紀以降14世紀前半以前の研究資料が当該地域に少ないため、その時代の遺跡を発見することが最初の調査目的になった。オマーン湾岸には私たちも1987年から毎年訪れていたが、本格的な調査が開始されたのは1994年であった。

1993年7月、シャルジャ首長国古文化財庁長官ナスル・アル・アブーディ氏と会見し、オマーン湾岸イスラーム時代の港湾都市遺跡あるいは交易拠点都市遺跡の調査を実施したい旨を申し出た。同年8月、同氏に許可願い文書を送付し、9月初めにシャルジャ首長国から公式の調査許可証が日本に届いた。その後、オマーン湾岸の遺跡踏査や発掘調査を実施した。同時にペルシア湾岸のジュルファール、ハレイラ、ジュメイラなどの遺跡発掘を継続し、サウジアラビア、オマーン、イエメン、イラン、パキスタン等の周辺国関連遺跡を訪れ、遺跡及び出土品研究等を科学研究費国際学術研究(1994-1996, 2000-2003, 2004-2007)、三菱財団(1994-1995)、鹿島財団(1998-1999)、西田記念東洋陶磁史研究助成基金(2000-2001)等の助成金補助を得て実施した。周辺関連遺跡研究成果はロンドンやオクスフォード、マスカット、アブダビ、シャルジャ、マナーマ等で開催された学会や研究会で研究発表した際に情報収集した。オマーン湾岸現地調査実施期間は1994年3-4月、1994年11月～12月、1995年11月～1996年1月、1997年3月～4月、1997年7月、1997年12月、1998年12月～1999年1月、2000年4月～5月、2000年12月～2001年1月、2001年4月、2001年9月、2001年12月～2002年1月、2002年4月～5月、2003年3月～4月、2003年8月、2003年12月～2004年1月、2004年4月～5月、2004年12月～2005年1月、2005年5月、2005年12月～2006年1月、2006年3月～4月、2006年12月～2007年1月、2007年12月～2008年1月である。第5期の成果については遺跡ごとに述べた[佐々木

2007]。

### 3. オマーン湾岸の歴史的背景

インド洋を航海してきた船舶はオマーン湾岸からホルムズ海峡を形成するムサンダム半島の先端部を廻ってペルシア（アラビア）湾に入る、あるいは入ろうとする。しかし、狭く岩礁の多い海峡を通過し、しかも海賊が出没する海域であったため、航海上の危険がかなり多かったという。そのため、オマーン湾に沿う海岸から上陸し内陸交通路を通ることが一般的であったと言われる。ムサンダム半島の切り立つ崖海岸に入る直前の、あるいは最後の町がディバであり、その30km南がコールファッカンである。こうした港に入航し半島の山を越えワディ沿いの交通路を使えば山岳と砂漠に接する比較的よい気候に恵まれ農業を営んだ地域に住む人々に物資を供給し、その産物を運び出すにも便利であったと思われる。沿岸地域にはペルシアの影響が強かった、すなわちイラン人が居住しイランの産物が流通したといわれる。ペルシアの政治的支配が続くことが多かったようだが、内陸部ではオマーン人が独立しているという考えもある[Ross 1874,p.118]。ただし、その実態は文献史料が少なく、考古学調査では人種問題の解決が難しく、不明なことが多い。しかし、人々の移動や動きは頻繁に行われていたと想像される。

この地域の港町に関する歴史地理的な知識はきわめて限られている。調査対象としている遺跡についての情報は文字資料が少ないこと、わずかに残るアラブの地理学者の記録は地名が出てくる程度であること、記録された地名が現在はどこに当たるかを知ることさえ難しいこと、等が研究を困難にしている。しかし、考古学資料は断片的ながら増加していることから、遺跡と文字資料の組み合わせによって、この地域の歴史的背景の大枠を推測することは可能である。

アラブ以前の文字資料では、ストラボン『地誌』、『エリュトラ海案内記』（1世紀）、プリニウス、Pliny, Periplus『博物誌Natural History』（77AD以前）、プトレマイオス『地理学』（2世紀）がある。この地域に関連するかもしれない町名がいくつか残り、ペルシア湾で真珠が採取されたことがわかる。これまでの研究によっても、現在どの場所に当たる町かを知るのは難しいが、それらの町は海岸の港町・貿易センターであったろうと研究者の多くが推

定している。地名だけでは遺跡と関連させて利用することが難しい文献ばかりである。プリニウスはオマナOmanaと呼ばれた港の位置は、ホルムズ海峡から東へ6日の航行にあるイラン側にあるという。しかし、Pliny the ElderはOmanaの位置をホルムズ海峡の西でアラビア側という。『エリュトラ海案内記』にはペルシア湾の口を6日間沿岸航行すると、そこにこのオマナがあるという[薮 1997]。オマナの位置についてはイラン側とアラビア半島側、ペルシア湾内とオマーン湾側の4カ所に分かれる。ホウラニHouraniはソハールSuharかマスカットMasqatあるいは他のオマーンUmanの港であったろうと推定していたが[Hourani 1951 p.17]、その後も多くの研究者がこの問題についてさまざまな意見を述べ[Potts 1990]、最近では考古学発掘の成果からペルシア湾内アラビア半島側の紀元後1世紀にほぼ限られる短期間の都市エド・ドゥールad-Dur遺跡を、発掘したポツツやヘリック等がオマナの有力候補と言う[Haerincx 2001]。最新の遺跡調査の成果と周辺環境、及び諸文献が紀元後1世紀頃の情報を記載しているとすれば、きわめて妥当であるがまだ確定することはできない。当時のオマーン湾岸のイラン側はパルティアに属し、ペルシア湾側の北部も同様であったようである。プリニウスはゲルッハGerrhaという大きな町があること、ムサンダム岬近くのAcilaという町はインドへ向けて出航する港であると述べている。ドゥ・カルディはElder Pliny the Elderが述べるインドへの出航地Dabanogoris regioは、ディバDibba かもしれないと推定しているが[de Cardi 1971 p.229]、推定理由は述べていない。インドとの貿易を行うDabaで始まる町名は現在のディバの可能性が高い。2004年夏にヘレニズム期の墓がディバで発見され、シャルジャ博物館のイッサが発掘し、メソポタミア緑釉瓶等が出土した。ディバは紀元後1世紀頃にも拠点的な町であった可能性がある。2004年の遺跡踏査でもディバの農園内遺跡から14～15世紀の中国青磁や15世紀のミャンマー青磁、中国染付や土器片を採集し、ディバの遺跡状態を推定できるようになった。当該遺跡の試掘は2006年12月に実施し、15世紀の遺跡が残ることを確認した。

アラビア海からオマーン海岸に至りその後、陸路を経てペルシア湾に入るか、陸路を通らずにムサンダム半島を回りホルムズ海峡からペルシア湾に入るか、この2つの交通路が最近まであった。インド遠

征から戻るアレクサンドロス軍の船がこの2本の交通路のどちらを選ぶかで論争していることが記される[大牟田 1996]のがこの交通路の文献に見える最初と薀は言う[薀 1998]。

アラビア半島の特産品は一般に馬、真珠、香料などと言われる。このうち馬は『エリュトラ海案内記』にカネー港の支配者への献上品として挙がるから、紀元後1世紀頃から貴重な品として登場したと推定できる[薀 2000]。それから半世紀ほど経つと騎馬兵が活躍しているから、馬が増えていると薀は言う。馬の増加はメソポタミアかイランからの移入が原因と推測されている。ただし紀元前2千年期にはラクダの家畜化が進行しており、アラビア半島ではラクダが馬以前から最近に至るまで一般的に利用されていることも知られる。真珠採取はペルシア湾に限られておりオマーン湾岸での真珠採取記録は見えない。最近までオマーン湾岸の多くの地域では真珠採取を行っていなかった。香料はアラビア海沿岸に見られペルシア湾沿岸では育たないが、オマーン湾岸北部地域も香料はなかった可能性が大きい。アラビア半島内の特産物に関する地域差はかなり見られる。

3世紀からペルシア商人がペルシア湾とオマーン湾を利用するようになったと言われ、ササン朝創始者アルダシール1世の征服がアラビア半島に及んだかどうか問題とされる。バハレン島とその周辺までは征服したがオマーン湾までは征服していないようで、バルティアやササン朝は当該地域の海岸地帯を支配地域としていた可能性があるという[薀 2000]。イスラーム化以前はアラブ人とペルシア人の入り交じる地域であったようで、ネストリウス派キリスト教も広がっていた可能性がある。ペルシア湾ではアブダビ首長国のダルマ島のキリスト教会跡がイスラーム時代に入った頃のもっとも東方における発見となることがアブダビの考古学調査で判明した[King 1998]。

アラビア半島を1年で巡回する定期年市があり、その起源は6世紀初頃で、ディバにはシンド、ヒンド、中国からの商人や東西の人々が来て、ジュランダが10分の1税を徴収したという[医王 1996]。最近まで定期年市が各地で開催されたことが知られている。オマーン湾を含む地域の商業の発達と交通路の整備の状態を知る手がかりとなる。ジャヒリーヤ時代の暦月はイスラーム暦と異なり、季節と密接な

関連をもち、新年は春分か4月に始まり、ディバの定期年市は第7月だから今の10月にあたり、北東モンスーンの吹き始める頃でインドからオマーン湾岸に商船が来る時期であり、ディバの定期年市はインドから来航する貿易船に合わせていたと推定できるという[薀 2000]。

この地域の中心的地域あるいは都市は、古代はオマナ、イスラーム時代に入るとジュルファールであった。オマナはその位置についてもさまざまな説があり、エドゥ・ドゥールとすれば紀元後1世紀に限られる。いくつかの時代の異なる町がオマナと呼ばれたかもしれない。アッバース朝頃のジュルファールは現在ジュルファール遺跡と呼んでいる14世紀後半～16世紀初頃の港町と異なる場所であったことも判明している。ヨーロッパの印刷地図に現れるジュルファールは、地図が刊行された当時には存在していなかったことも判明している。紀元一千年紀及び二千年紀のオマーン湾岸の具体的な歴史は不明瞭であり、もっぱら遺跡の発掘成果に頼ることになるが、地勢や環境から見てもインド洋貿易と沿岸漁業、農牧業に頼る生活が繰り広げられていたと推定できる。

1492年、ベネチャやエジプトと紅海の香料貿易の支配権を争っていたポルトガルがインドに到達すると、新たなインド洋貿易段階が始まった。グジャラティやアラブの商人が活躍していた海上貿易をポルトガルが侵略し始めたといわれ、16世紀初頃インド洋に進出したポルトガルによりペルシア湾やオマーン湾の主要な港が征服されていった。アラビア側からではなく、来訪者側の記録が散見されるようになる。

16世紀初めのバティナ海岸の状況はつぎのように述べられている[Albuquerque 1875 II,p.99]。ポルトガル船がバティナ海岸を帆走しているとき、ポルトガルの司令官Affonso d'Albuquerqueはすべての港という港を必ず襲った。多くの場合、港の船舶ばかりでなく街そのものも破壊した。漁民の葦家や網を焼き払い、デーツ園を切り倒した。ポルトガルが去ったとき、立っている建物は一つもないほど、町は徹底して焼き払われた。コールファッカンKhawr Fakkanに住んでいたグジャラティGujerati商人の集団は、町が襲われる直前に荷物を持ってなんとか逃げることができた。しかし、その他の住民は、男、女、子供を問わず殺されるか、または抵抗の悲惨な結末の見せしめに耳と鼻を切り取られたという。16世紀初頃、

バティナ海岸のすべての港町は悲劇的な大惨事によって廃墟になり、復興は困難をきわめたことが推測できる。このため、バティナ海岸では中国陶磁器の発見が少ないのかもしれないとドゥ・カルディは述べた[de Cardi 1970 p.292]。現在でも16-17世紀の中国陶磁器が遺跡から発見される量は極端に少ない。

1514年、ついにペルシア側の拠点港湾都市ホルムズがポルトガルに屈伏し、次いで湾内の貿易港パハレンが1521年に支配下に入る。こうしてポルトガルはアラビア海貿易の支配者になり、貿易の拠点となる港町に砦を築いていったという。ジュルファールもこの頃ポルトガルによって征服され、要塞が築かれ税関が置かれたという。ポルトガルはインド洋の東側では1511年にマラッカを支配下に置き、香料貿易を独占しはじめ、1557年にマカオに拠点を設けた。16世紀後半にインド洋西側での中国陶磁器やその他の物資流通に果たしたポルトガルの役割は大きかったであろう。しかしオマーン湾岸遺跡からの出土量は少ない。ポルトガルが16世紀にペルシア湾・オマーン湾岸地域を支配するようになって、その影響範囲は砦を中心とする地域に限られたと推測できる。そのため、ポルトガルの文献にアラビア全体が記録されることは少なかったといわれる。また、オマーンに対する都市民の抵抗運動で記録類が焼かれたことによっても推測されている[Ross, 1874]。

湾岸地域にはポルトガルの後にオランダ、そしてその直後にイギリスも到来した。いずれの国も貿易利権の獲得を目指していた。町が完全に無いという状態ではなく、資源もあったと推定できる。1585年にイギリス人商人たちがホルムズに着いたが、競争相手のポルトガルはそれをスパイ行為とみなし、すぐに彼らを投獄した。しかし1600年、ペルシアはイギリスに貿易権を与え、新たに創設されたイギリスの東インド会社はペルシアのバルチスタン海岸に貿易の拠点を設けた。イギリスの貿易船はポルトガルの攻撃を受けるようになるが、1622年ペルシアとイギリスは連合してポルトガルをホルムズから追い払い、イギリスはそこに駐留し、後に新港のバンダル・アッバスへ移る。

16世紀末には各地でポルトガルの乱暴な行動が現地民との間に度重なる紛争を巻き起こした。ポルトガルの支配に対するアラブ人の抵抗も続いていた。ジュルファールもホルムズ側に付こうとしていた。それに気付いたポルトガルは、1621年大モスクから

街を攻撃し、要塞を破壊し、ポルトガルの小部隊が残された[Andrada 1930 p.51-2]。1633年ジュルファールはオマーンの軍隊によって解放され、ポルトガルは終に東アラビアの拠点マスカットから追い出された。ポルトガルが去った後の17世紀後半以降の中国陶磁器も遺跡からほとんど採集されないのは、オマーン湾が海賊の略奪場所になったため住民が陶磁器を輸入する量が少なかったとも推定できる。またはオランダも多くの陶磁器を西に運んだが、その船舶がアラビア半島各地に寄港することはなく、南の喜望峰を廻ってヨーロッパに向かったためかもしれない。こうした推定の歴史的事実態は発掘を含む遺跡調査によって明らかになる。

#### 遺跡とその周辺の状況

ディバDIBBA, Diba, Daba, Doba, Dvbo : オマーン湾の西北隅のくびれ部湾内に位置する港町がディバであり、ムサンダム半島の東側付け根にあたる。これより先のホルムズ海峡まで町は存在しない。サンスクリットの島はdvipaであるが、インド人が名付けた町名かもしれない。ただしDibbaには島がない。ホルムズ海峡に近い港なので島のように見えたのであろうか。ここからワディを通り山越する道はマサヒMasafiに通じる。山は灌木がまばらに生える程度で、小石や岩が露出している部分と、泥や砂で覆われた部分が見られる。遠距離航海に積み込む食料と水の補給のためには地理的に好適な場所である。ディバもインドへ向かう船舶が船出し、ペルシア湾に入る船舶が停泊する港の一つであったろう。町の南東側は海岸に山が迫り、海岸を通る道ができたのは最近のようである。西側の山内には谷部に多くの路が走る。ムサンダム半島の東西、オマーン湾岸とペルシア湾岸にそれぞれ位置するディバDibbaとジュルファールJulfarの間は徒歩でワディを通り一つの山を越えると一日行程の距離である。西側に山を越えるとアル・カッタal-Khattの南側に出る。南に下って西に出るとマナーマの南側に出る。陸上交通路で内陸部に物資を運ぶ場所としても好適である。ディバの北側にあるムサンダム半島のルース山脈Ru'us al-JabalにはシーフーShihuh族が住んだが、山にも海岸にも陸上の道はなかった。最近まで海岸線が複雑で入り江に富むムサンダム半島は小舟が日常的な交通機関であった。

P.B. de Resende, El Livro do Estado da India Oriental[British Museum Sloane MS.197,fol.149-150]に



よると、ディバの湾岸には三つに分かれた城壁に囲まれる家々が並び、城壁の外にはナツメ椰子樹園が描かれている。中央には方形石作りの小さな城が位置している。壁は二重になり、上を歩ける強固な壁によってつながる四隅の塔には大砲が配置されている。司令官の住む区域に加えて、教会、倉庫、井戸があると、ドウ・カルディは図を読み取っている[de Cardi 1971 p.233]。豊かな生活と富の存在あるいは支配を想像させる図である。この図と同じような城壁が存在していたことをウィルキンソンが指摘している[Wilkinson 1964]。

コールファッカン KHAWR FAKKAN, Corfacam, Corfaqan : コールファッカンはおマーン湾岸の港町である。入り江の南部に2つの小湾が並び、コールファッカンの中世港町跡と砦跡が小湾に沿って築かれていた。古い町は岩山の下湾岸平坦部にあったと推定している。16世紀前半に廃墟となり、20世紀初の写真には、この地に家や町はない。現在は漁港、貿易港、観光リゾート地として知られ、古い家も僅かだが残る。現在の町は移転後にできた新町で、海岸から続くなだらかな山中の平坦地斜面にある。1529年にポルトガル人 Weimar planisphere が作成した地図には[A.Cortesao, A.T.da Mota, Portugaliae Monumenta Cartographica, Lisbon, 1960, I, pl. 40a]、Corfacanとして載るが、その位置は正しくないという指摘もある[de Cardi 1971 p.232]。

カルバ KALBA, Quelba : 1620年に描かれた図には角に稜堡がある石壁で四角形の Fortが見える[de Cardi 1971 参照, Plan by M.Godinho de Eredia, c.1620; A.Cortesao, A.T.da Mota, Portugaliae Monumenta Cartographica, Lisbon, 1960, V, pl.581]。ドウ・カルディはこの図について次のように述べる[de Cardi 1971 p.233]。内側に面する防御施設は側面が丸くなる壁で広がっている。小さな丸い塔が漁夫を守るために砂浜に建てられている。北側の高い稜堡には、水漆喰塗りの司令官本部、倉庫らしいもの、30人の駐屯兵が住む藁葺きの泥レンガ建物、そして中庭に井戸がある。多くの Fort は門が1つだが、カルバでは門が2つあり、海岸部と陸地側に向いている。カルバとコールカルバの間にも少し内陸部でワディ・マドハ Wadi Madhah に沿って Fort が描かれている。1635年の地図に載るカルバのポルトガル Fort はほぼ四角形で角に稜堡があることをドウ・カルディが指摘している[de Cardi 1971 参照, de Resende, El Livro do

Estado da India Oriental 1646, British Museum Sloane MS.197]。

コールカルバ KHAWR KALBA : コールカルバ付近一帯はマングローブの茂る低湿地サバハ Sabkha である。木材資源の少ない乾燥地帯でマングローブは船舶材、屋根材、燃料として利用されたであろう貴重な資源である。低湿地周辺の海岸に沿う砂丘上にジュルファールやハレイラと同様の遺跡が存在することを期待していたが、数度の踏査によっても砂丘上に遺跡は発見できなかった。

## 文献

- Albuquerque, 1875, The Commentaries of the Great Affonso Dalboquerque, I-II. Trans. W.de G.Birch, Hakluyt Society, LIII, London.
- Andrada, 1930, The Commentaries of Ruy Freyre de Andrade. Ed. C.R.Boxer. The Broadway Travelers Series, London.
- Barbosa, D., 1918, The Book of Duarte Barbosa, I. Trans. M.L.Dames, Hakluyt Society, 2nd ser., XLIV, London.
- Bibby, T.G. 1965, 66, Arabiens Arkaeologi, Kuml.
- Chang, T'ien-tse, 1934, Sino-Portuguese Trade from 1514-1644, Leiden.
- de Cardi, B., 1970, Trucial Oman in the 16th and 17th Centuries, Antiquity, 44; 288-295.
- de Cardi, B., 1975, Archaeological Survey in Northern Oman, 1972, East and West, 25-1,2; 9-75 de Groeje (ed.).
- de Cardi, B., 1877, al-Muqaddasi, Kitab ahsan al-taqasim, (Bibliotheca Geographorum Arabicorum, III), Leiden.
- de Cardi, B. & Doe, D.B., 1971, Archaeological Survey in the Northern Trucial States, East and West, 21-3,4; 225-289.
- Frifelt, K., 1969, Arkaeologiske undersogelser pa Oman Halvoen, Kuml.
- Haerincq E., 2001, "Archaeological research at ed-Dur, a large coastal site at Umm al-Qaiwain, U.A.E. of the 1st. c. A.D." 『第8回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』
- Jaubert, P.A. (trans.), 1886, Geographie d'Edrisi, I, Paris.
- Locke, J.C. (ed.), The First Englishmen in India. Letters and Narratives of Sundry Elizabethans. The Broadway Travelers Series, London.
- Kervran, M. & Hiebert, F., 1991, Sohar préislamique, Note stratigraphique, (K.Shippmann, A.Herling & J-F.Salles eds., Golf-Archäologie, Buch am Erlbach, 337-348.

Kervran, M., 1996, *Indian Ceramics in Southern Iran and eastern Arabia: repertory, classification and chronology*, (H.P. Ray & J-F. Salles eds., *Tradition and Archaeology: early Maritime contacts in the Indian Ocean*, New Delhi.), 37-58.

King, G.R.D., 1998, *Abu Dhabi Islands Archaeological Survey*, Trident Press Ltd.

Maurizi, V. (Shaik Mansur), 1819, *History of Seyd Said*, London.

Mundy, P., 1919, *Travels of Peter Mundy*. Hakluyt Society, 2nd ser., XLV, London.

Piacentini, V.F., 1992, *Siraf and Hormuz between East and West: Merchants and Merchandise in the Gulf*, *Global Interests in the Arab Gulf*, ed. by Charles E. Davies, 1-28, External Press.

Potts, D.T., *The Arabian Gulf in Antiquity*, Vol. 1, 2, Oxford, 1990.

Ross, E.C., 1874, *Annals of Oman, from early times to the year 1728 AD*, *Journal of Asiatic Society of Bengal*, XLIII, pp. 111-196, Calcutta. (A Partial translation of the *Kashf-al-Ghumma* by Sirhah bin Sa'id al-Azkawi. This was probably completed shortly after 1728.)

Wilkinson, J.C., 1964, *A Sketch of the Historical Geography of the Trucial Oman down to the Beginning of the 16th Century*, *Geographical Journal*, CXXX-3; 337-349.

医王秀行 1996 「ジャーヒーリーヤ時代の偶像神と巡礼行事」『東京女学館短期大学紀要』18:1-19.

大牟田章 (訳註) 『フラウィオス・アッリアノス アレクサンドロス東征記およびインド誌』東海大学出版会, 1996.

佐々木達夫・佐々木花江, 2007 「ディバ農園内中世遺跡の踏査と第1次発掘調査」『金大考古』56:6-10. 佐々木達夫, 2007 「オマーン湾岸北部地域の遺跡出土陶磁器」『金沢大学文学部論集史学・考古学・地理学篇』27, 203-282. 薮勇造 1997 「新訳『エリュトラ未案内記』」『東洋文化研究所紀要』132:1-30.

佐々木達夫, 佐々木花江, 2007 「アラブ首長国連邦マサフィ砦の発掘2006年」『平成18年度今よみがえる古代オリエント・第14回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会, 105-110.

薮勇造, 1998 「文献史料に見る南東アラビア(1)ササン朝支配期以前」『金沢大学考古学紀要』24:20-38.

薮勇造, 2000 「文献史料に見る南東アラビア(2)ササン朝支配期～イスラーム征服期」『金沢大学考古学紀要』25:19-31.

## 第2章 コールファッカン砦

### はじめに

コールファッカン砦 Khor Fakkan (Khawr Fakkan, Khorfakkan) fort はオマーン湾岸のイスラーム時代砦遺跡である。本来の名称が不明なため、コールファッカン砦と呼ぶこととする。北緯25°20'33"、東経56°21'49"に中央塔が位置する。コールファッカン砦は北側に港を見下ろす海拔50mの小山頂上に築かれ、コールファッカン湾の全貌を北側に、新市街を北西側に、旧市街跡を西側に見渡すことができる。砦は考古学遺跡として周知の遺跡であり、我々も1994年3～4月にバティナ海岸遺跡踏査の際に遺物の表面採集を実施した。1994年踏査時の遺物採集は主に砦西側斜面で行われ、北側、東側には遺物の散布が少なかった。

コールファッカン砦が築かれた小山の北側裾と周辺の山が港湾施設拡大のため1994年春から夏に掘削された。シャルジャ博物館のイッサ・アッバス・フセイン Eisa Abbas Hussien Yousef はシャルジャ政府として遺跡保護を行うこととし、1995年の11～12月、シャルジャ博物館長サバ・ヤシム Sabah Jashim を中心に砦発掘が実施され、佐々木も遺構写真撮影等を行い、発掘調査報告は佐々木が担当することとなった。出土した陶磁器片は1995年12月に写真撮影した。15～16世紀の陶磁器も少量あったが、大部分の陶磁器片は18～20世紀のものであった。発掘時点での記録が不十分であったため、2001年12月から2002年1月に砦の地形測量及び遺構実測、出土品の実測を行った。併せて砦に隣接する旧市街・コールファッカン町跡の発掘を実施した。その後毎年コールファッカン砦を訪れたが、2007年12月に砦が削り取られていることを確認した。港施設を建造するため周辺の山を含めて削り、海を埋めて港施設を拡充しているが、シャルジャ首長国考古局と港湾施設との合意で砦のある山を保護する契約は無断破棄された。

### 調査経過

1994, 1995年の調査後、2001年12月23日からコールファッカン砦の測量準備を始める。6時30分測量開始、12時30分終了。砦の裾野を含めて周辺山地はかなり掘削されており、1990年代後半に地形が変化している。海拔は海岸にそびえる砦東側の88m山頂から計算し、タワー床面を50mとする。88m山の南に隣接する112mの山はすでに頂部が削られて平坦に

なる。砦と88m山の間には湾が深く入り込んでいたが、今は周辺の山を削った岩で埋め立てられ、港湾施設ができています。砦の西側は古い町があったが、今は住民が新町に移住し港湾施設に伴う道路建設のため建物が撤去され平坦地になる。独立丘陵状となる部分に築かれた砦内では現在見張りタワー床面部分がかつとも高く、海拔50mである。27日、地形測量継続。29日、コールファッカン砦下の平坦面に南北トレンチを掘り始める。砦見張りタワー中央部から西に150m、南に90mの点とさらに130mの点をトレンチ線とし、2mの幅で西側を掘る。30日、砦測量の継続。コールファッカン砦下平坦面のトレンチを継続発掘。最近撤去した建物の残骸が現れる。31日、トレンチ継続発掘と砦測量継続。トレンチは厚いコンクリートとビニールの層に覆われている。2002年1月2日、測量とトレンチ発掘継続。5日、砦測量、トレンチ発掘を継続。6日、7日、砦測量、トレンチ発掘を継続。8日、砦測量、トレンチ発掘を継続。トレンチ内で住居石壁を同じ面を出す作業をする。住居に伴う面は20世紀前半頃か。9日、町跡石壁測量を始める。トレンチ発掘を継続。強い雨が降り、11時過ぎに終了する。10日、砦測量、トレンチセクションの一部実測を始める。トレンチ発掘。12日、砦測量図の点検と補正修正実測。トレンチ発掘継続。13日、トレンチ発掘継続。砦測量図の修正。レベル2で、いくつかの炉が集まる近くに擦り潰し用の石棒が出土。14日、トレンチ発掘継続。港のクレーンに登り、砦東北側の側面を写真撮影。セメント層などの表土の下に遺構が現れ、遺構のある層位をレベル1とする。レベル1の石家壁の下にレベル2の表面となる層位がある。アサリ貝殻を主とする散布があり、灰も混じり、土器と陶器の小破片が少し、ガラス・バングルが1点、ガラス小容器1点等が出土。16日、シャルジャ考古学博物館に機材と出土品を保管し、翌日帰国。

### コールファッカン砦の構造 地勢と位置

コールファッカン付近は石灰岩を基本とする岩山が北を向くと、左側上方向に褶曲して露出した岩並が北西と南東方向に走る。山並みの稜線も同じ方向に並び、細い尾根上に小山と鞍部が連続して見られる。砦もそうした小山の頂部を利用して築かれた。湾や入り江、島も同じ並びで造られる。20数年コールファッカンに住む人は1984年以降、雨量が少なく

なったという。それでも他のアラビア半島地域と比較すれば冬の雨量が多く、地下水も豊富である。コールファッカン西方の山間にあるマサヒは今でもミネラル水の産地として知られる。

砦はコールファッカン湾の南側に位置し、海拔50mほどの小山上に築かれている。東側には小さな入り江が入り込んでいたが、1990年代後半に埋められた。東側の海岸に沿う山は山頂海拔88mとその東南の海拔104mの山である。2001年の時点で104m山は頂上から数十mが削平され、港施設拡張の埋め立て土として使用されている。この2つの山の鞍部に先史時代の住居跡があったとサバ・ヤシムはいう。同時期の墓もあった。これらの小山の東北に小さな島が1つある。上部が削平された104m山の南側入り江に白い砂浜があり、最近まで海亀産卵場所として知られていた。

砦北側山裾は削られており、砦下方はすでに道路と同じ高さの平坦部となり、道路と港施設となる。砦の築かれた稜線はさらに北東に延びており、以前は海に浮かぶような状態で海岸に接して三角錐状小山があった。1970年代と推定できる航空写真を見ると、二つの小山をつなぐ稜線部分の周辺も平坦な陸地となり、港施設が造られている。三角錐状小山の下に港が作られたのが1973年であったと地元民がいう。この時点では三角錐状小山はまだ削られていない。1976年作成図には砦の海側に三角錐状小山が描かれている。小山の北側海岸に小さな港施設も描かれている。三角錐状小山はこの時点でまだ存在している。88m小山から海に突き出た大きな栈橋も描かれていない。いくつかの航空写真を見ると、栈橋はあるが砦と88m小山の間の湾は埋められていない。1994年踏査時点では東側の岩肌が剥き出しになった湾に海水が入っていたが、その時点でも埋め立て工事の一部が始まっていた。

砦西側下方裾に接して現在建物があるが、この部分まで海岸だったと現在撤去された古い町に住んでいた人がいう。砦下方の西側地域は南側が岩山となり北側は現在の道路部分は海岸で、その間の平坦地に旧市街があったと推定できる。海岸に近い、砦に近いという位置は町の当初建設の場所であろう。とすれば砦建設当時の町もこの付近にあった可能性が大きい。地元民の話によれば、砦に隣接する地域は1945年以降、イラン海岸地帯から移住してきたイラン人が居住した場所であったという。

砦の南方には稜線に沿ってより高い小山があり、その南向き緩い斜面には石積み墓地が広がる。先史時代の墓とサバは解釈しているが、イスラーム時代の墓も含まれる可能性がある。さらに上方の99m小山頂上には石積みタワー1基が築かれている。石積みの中には泥モルタルは詰められず、石積みのままである。コールフアッカン湾とオマーン湾が見渡せる位置にある。

港湾施設の拡大整備によって20世紀後半に砦及び周辺の地形が変化した。地元民と3種類の航空写真、1976年作成地図、及び1994年踏査、1995年観察などから次のように地形変化をとらえることが可能である。海に浮かぶような海岸沿い小山周辺に1973年頃から小さな港施設が造られた。88m小山から海に突き出るような巨大棧橋を造成中の写真には、海岸沿いにある三角錐状小山が残るが、104m小山上部が削平されている。これは1994年頃以降であろう。その後には砦のある50m小山と88m小山の間の湾が埋められる。砦のある50m小山裾が段状に削平されたのは1995年頃である。

1994年3月に旧町から撮影した写真には削平前の砦が写り、西側にも石積み壁があったように見える。1976年作成図には海岸沿い小山は10mと20mの2本の等高線が描かれている。砦部分はこれに加えて40m等高線が塔部分付近に描かれている。ともに20mの等高線が回り、十数mの鞍部が存在したことがわかる。この鞍部は削られて現在は海拔数mの道路部分になっている。

### 砦周壁及び石積み壁

砦は北東側を囲う石積み壁（石垣、石段、周壁）の残りがよい。西北側と東南方向にも石積み壁が残り、数段の石が積み重ねられた周壁が等高線に沿って緩やかなカーブを描きながら延びている。西南側の囲い石積み壁は1990年代工事によって破壊されたと思われたが、削られずに残る部分や石垣裏込め小石がわずかに残る状態から、その元の位置が図面に復元したように推定できる。数段の石を積んだ壁が見える部分もある。西北突端はわずかな高さの石積み壁の痕跡があり、船の舳先のように狭くなる。東南側は緩やかな傾斜面で西北側と比べると砦内敷地幅が広い。東南側の石壁中央には出入り口があり、石壁も2列になる。内側壁から外に付きだして円形の塔基礎石壁が残り、その外側に砦外側石壁がある。

砦出入り口はこの塔の南西側になることが石垣及び地形から推定できる。

見張り塔（タワー）はほぼ直線上に3基あるため、北側から順に西北塔、中央塔、南東塔と名付ける。砦周壁は大きな石を積み上げ、その裏にやや小さな石や土砂を詰め、砦内に平坦面を造る。中央タワーそのものと室基礎となる部分は小さな石を積み上げる。いずれの壁も石積みが基本である。砦周壁に使わなかった泥モルタルを砦内側の石積み壁や基礎部に用い、泥モルタルを石間に詰め、表面に同じ泥モルタルを塗る。ルリーヤ砦の周壁も泥モルタルは使用せず、石積みだけであった。

### 塔

塔（タワー）はいずれも見張り用塔であろう。50m小山頂上部に中央塔が築かれる。床面海拔は50mである。泥モルタルを塗り床とする。タワー床面径は3.8mほどである。外側円形基礎部の径は7.5mである。塔上部は壊れて残らない。床面より下方の外壁石積みが残る部分があるが、それでも詰め土砂が残るだけの部分が多い。塔下面から床面まで高さ1.8mで、外側面は石が10段ほど積まれている。外側石積みの中には泥モルタルを詰める。石積み外側全面に泥モルタルを塗ったのであろう。一部に石面を覆う泥モルタルが残る。泥モルタルは薄いピンク色で、細かな貝片と石灰岩が混じる。タワー基礎部から放射状または部屋壁方向に短い石壁が延びる。支え壁あるいは壁の防御用であろう。泥モルタルを間に詰めた同様の造りである。床面北側端には方形台が2つ並んで置かれている。石で方形を造り、泥モルタルを詰め、上塗りしている。現在は西側部がわずかに基礎だけ残り、東側は床面に窪み状で痕跡が残る。大砲置き台車の両側であろう。

西北塔、東南塔はいずれも長方形プラン砦の両端に位置する。東南塔は方形石壁の角ではなく、ほぼ中央にあり、石垣が2重に並ぶ2列の石壁内部に築かれている。外側径10mである。西北塔は外側5.6mである。西北塔は現状では1列しか残らない石壁の外に築かれているが、さらに北側に石壁があったと推測できる。砦山と海岸に沿う小山の間には十数mの鞍部があったことが1976年作成地図からわかるが、現在は道路で削平されている。その際にもっとも北側となる石壁1列が削られたと思われる。

## 部屋

中央見張り塔の北側平坦面にいくつかの小屋がある。壁には石や珊瑚を積み、その間に泥モルタルを詰め、表面は石や詰め土の上に泥モルタルを2.5～3cmほど塗っている。壁厚さは東西の厚い壁が55cm、南北壁が50cm、Date pressの西側に接する壁が45cmほどの厚さである。壁内には石や珊瑚が泥モルタルとともに詰められ、表面に泥モルタルを塗る。部屋は現在明瞭にわかる部分で、西側に2室、さらに接して小さな部屋が2室、また東側に台所施設がある部分とDate pressがあり、その間は三角形であるが1室となる。三角形の部屋は天井のない倉庫のようであり、2つの方形台の痕跡がある。三角形の部屋または空間に接して周壁との間に小さな部屋があったようである。空間的な配置から部屋の存在が推定できるが、現状は壊れ土台が流れているので証拠は残らない。Date pressとタワーの間の台所と推定できる部分は、長方形の台があり、石と泥モルタルで造られる。暗渠となる小溝があり、水が流れたことがわかる。溝上に小石を並べ、泥モルタルを塗っている。台所施設から流れる水を排水したと推測できる。小溝南側に焼け土があり、炉と推測できる。床面にわずかに痕跡を残す方形台と棗椰子ジュース製造施設との間の狭い部分に、円形パン焼き竈の痕跡がわずかに残る。直径85cmほどである。狭い部分に密集して台所関連施設が置かれていたと推測できる。

床面と壁面にはタワーで用いた泥モルタルと同じものがきれいに塗られる。室数は現在の残り状態から推定したが、中央タワーと室の両方の基礎段となる石段はさらに広い部分もあるから、小さいけれども室数は4～5室増え、平坦な面積はさらに広がる。

## 棗椰子ジュース製造所

棗椰子から出る汁デブスを集める施設Date Pressは残りが悪く、平面全形を推定するのが難しい。1995年撮影写真と今回の観察から、東西方向の横幅は3m、南北方向の奥行きは2mほどと推定できる。床には小さな直方体状石片を並べ、上に白色漆喰を塗って畝状の高まり部を作る。その間は浅い溝状となり、汁が流れる部分となる。畝と溝は南北方向である。北側は壁であろうから、南側に出入り口、取り出し部があると復元できる。北側は砦部屋全体の基礎となる石垣基部と、その内側のDate press基礎の石段が1mほどの距離でほぼ接している。石垣はほとんど崩

れており、床面の高さで残る部分はほぼ無いが、下部の外側線は図示したように推定できる。

## 出土品

発掘による出土品と1994年やその後の採集品がある。大砲砲弾の錆びて小さく剥離した状態の鉄片が床面や周壁内外の数カ所に残る。表面に落ちている物で原形を留めるものはないが、元の大きさを復元推定できる鉄製砲弾が周壁外から1個採集された。ほぼ球形と復元でき、直径8.4cmである。まだ砦内に埋もれた砲弾があることが表面観察でわかる。石臼、鉛板、ガラス片も出土している。陶磁器。わずかな数量の陶磁器片が遺跡内に散らばるが、多くはすでに採集されたようである。スグラヒアトSgrafiato。碗。中国青磁碗Chinese green ware。碗。15世紀。中国染付Chinese blue and white。碗、カップ、皿。18-19th centuries。中国色絵Chinese enameled ware。碗、小碗、カップ。18-19th centuries。ミャンマー青磁盤Myanmar green ware; gray fabric. Dish. 15-16th centuries。褐色釉陶器碗Brown glazed ware; pale pink fabric. Bowl。淡緑釉彩文陶器Pale green glazed ware with black and green painted; yellow fabric. Bowl, large bowl。無釉土器Earthenware; pink, red fabric. Jar, vase, cooking pot, etc.。彩文土器Painted earthenware; red fabric. Vase, cooking pot。ヨーロッパ施釉陶器European painted ware. Bowl, dish, vase。ガラス容器Glass, vessel。

中国染付は明代製品が未発見である。中国清代の染付、色絵磁器は多く発見できる。イスラーム施釉陶器も多いが、その種類はジュルファール遺跡出土品と異なり、明らかに時代差があり、コールファッカン砦出土品のほうが新しい。無釉土器は発見数量がもっとも多い。博物館に置かれていたKhorfakkan findsを整理しているとき、1996年3月22日付の遺物袋があり、紀元前の石製容器、大型や小型の土器片が入っていた。胴部片が多いが、注口、把手、彩文土器片などもある。砦出土品でなく、隣接する小山に残る墓や住居跡の出土品と推定できるものである。

## コールファッカン砦構造の概要

砦は小さな細い岩山の上の平坦部を利用して築かれ、全長140m、最大幅60mの細長い長形状の平面形である。砦周囲は石積み壁で囲われている。出入り口は南側の2列の石壁に挟まれた円形塔の側にあ

る。円形塔は出入り口部を含めてほぼ直線上に3基ある。周囲の石壁は石面が剥き出しのままであるが、砦内の石積み壁は泥モルタルが塗られる。中央塔の床面は海拔50mで、内径3.8mである。中央塔には周囲に放射状に短い支え石壁がある。西北塔、東南塔は長方形プラン砦の両端に位置している。中央見張り塔の北側平坦面に居住用の小部屋がある。部屋は西側に2室、それに接して2室、東側に台所施設、及びDate pressがある。その間は三角形となる中庭があり、倉庫としても用いられた。台所施設には排水溝や円形パン焼き竈がある。防御施設を整えた常時居住用の砦と判断される。

### 第3章 コールファッカン町跡・エム・ゴバーナの発掘 発掘地概要

遺跡はアラブ首長国連邦シャルジャ首長国コールファッカン湾内の海岸、コールファッカンで最古の町が形成された場所と筆者が推定しているエム・ゴバーナEm Gobanaに位置する。南側には急峻な岩山がそびえ、北側は湾内の砂浜、西側はワディを中心に山麓から海岸に広がる農園、東側は砦が築かれる狭い丘陵が緩やかに下がりながら北に延び、砦山の先端は海に突き出た円錐状岩山となる。砦東側にはAl Bandarと呼ばれた小さな細長い入り江があった。こうした地形に囲まれたエム・ゴバーナは漁船の停泊に適した静かな湾と防御しやすい岩山に囲まれ、農園をもつ町であった。

ポルトガル砦が海岸の平坦面に建てられ、背後に高い山があったことがポルトガル砦を描いた古地図から推定でき、その地形に合う場所が発掘地エム・ゴバーナである。表面採集品には19～20世紀のゴミがあるが、そのなかに14～15世紀の中国青磁や染付、ミャンマー青磁が含まれ、ポルトガル来航以前から町のあったことが推定された。発掘調査で15世紀を中心とする家跡が発見された。貿易品としての陶磁器や魚・貝・動物などの食料残滓が出土し港町遺跡研究が進展した。

1994年に砦および町跡の遺跡踏査を行い、2001年12月から2002年1月にコールファッカン砦測量調査と併せて砦西側に広がる平坦面の第1次発掘調査を実施し、第2次発掘調査は2003年12月から2004年1月、第3次発掘調査は2004年12月から2005年1月、第4次発掘調査は2005年12月から2006年1月、第5次発

掘調査は2006年12月から2007年1月、第6次発掘調査は2007年12月から2008年1月に実施した。発掘区域の東北隅は北緯25° 20' 29"、東経56° 21' 45"である。発掘した地点は旧町跡の北東部の海岸に沿う一部であり、町跡の中心部はまだ地下に眠っているが、これで発掘を終了し報告書作成の図面整理や出土品整理実測に入ることにした。

#### 調査経過

廃墟となつてすぐの地域を1994年に踏査した。まだ20世紀後半の家壁が建ち、室内に生活用具の一部が散乱する状態であった。18～20世紀の陶磁器片を採集した。その後、当該地は完全に更地になったため、第1次発掘調査を2001年12月23日～2002年1月17日に、コールファッカン砦測量調査と同時に実施した。トレンチ発掘は港建設用の生コン車が廃棄して地表面に体積したコンクリートをツルハシで割る作業に費やされた。

第2次発掘調査は2003年12月19日～2004年1月14日に実施した。2003年12月21日、第1次発掘トレンチに堆積したゴミを清掃し、厚い表土層の残りを掘り下げる。パキスタン人21名。作業時間は7:00-9:30、朝食、10:00-12:20、祈り時間、12:50-13:30。22日、第1次発掘調査で、コールファッカン砦下平坦面に南北トレンチを設定した。砦見張りタワー中央部から西に150m、その点から南に90mの点を基点Aとしてさらに130m先の点を結ぶ線をトレンチ枠線40mとし、西側2mを掘った。測量は日本海航測が実施した。しかし、第2次調査に測量するとトレンチ枠線は南北方向でなく、西側に16°振れていることがわかった。そこで基点Aからすでに掘ったトレンチ線方向（磁北から16°西に振れる）をそのまま利用し、基点Aから南南西方向2.5m地点を0mとし5m間隔で35m地点まで鉄杭を打ち、0mと30mの西側20m地点にも鉄杭を打つ。南北方向からずれた形の30m×20m発掘区域を再設定した。23日、トレンチ内清掃と表土を掘る。コンクリート層を割るのに時間がとられる。24日、表土を剥ぐ。25日、表土を剥ぐ作業。26日、実測図をスキャンしてトレース。28日、本日から現場作業時間を6:30-9:30、10:00-12:30と変更する。大型コンボを用いて遺跡表面のコンクリート層と碎石層を撤去する。夜、今年冬初めての小雨。アラビア語新聞3紙に日本人考古学者がコールファッカンで遺跡発掘という記事が載る。29日、表土層の残り

部分を掘る。30日、表土層の残り部分を掘る。31日、表土層の残り部分を掘る。2004年1月3日、表土層発掘継続。一部で最近の家壁を追い始める。夕方小雨。4日、表土層発掘継続。5日、6日、表土層発掘継続。ドラム缶利用のパン焼き竈の撮影。7日、表土層発掘継続。シャルジャ首長国首長シェイクスルタンに会い、遺跡発掘状況、日本招待を伝える。シャルジャテレビで会見の様子を夜放映される。8日、表土層発掘継続。風強く、埃が舞う。7日のシェイクスルタン会見記事がGulf等の新聞に掲載される。10日、表土層発掘継続。Sharjah TVが取材で遺跡に来る。11日、表土層発掘継続。12日、表土層発掘継続。13日、シャルジャ国立考古学博物館倉庫に出土品を置き、15日帰国。

第3次発掘調査は2004年12月から2005年1月に実施した。12月12日日本発、13日朝シャルジャ国立考古学博物館で挨拶・調査打ち合わせ。コールファッカン町跡で港湾管理建物建設工事が数ヶ月前に始まり、博物館長は工事ストップをかけたが工事は進行中という。14日、日の出6時51分。今年の気温は例年より低く、最高26~30度、最低17~20度ほど。パキスタン人作業員20名が遺跡内にテントを張り調査の1ヶ月間住む。作業員の勤務時間は8時間。作業時間は6:45-9:30、朝食、10:00-12:30、祈り時間、13:00-14:45。テント生活作業員食事作りに2人が専従する。トレンチは一部埋められていたがほぼ破壊から免れたため、同じ場所を継続発掘とする。西北方向の海側道路に沿って大きな建物が建設中で建物の周りが掘り下げられている。地表面から数十cmは砂などの堆積であるが、その下は1.5~2mほど石積み壁家の層が見え、壁のない部分には砂の堆積も見える。それらの下は水平堆積した砂で、砂には貝殻が水平堆積しているのが見える。石積み家壁のある層は紅色土でその下の自然の砂層とはっきり区別でき、コールファッカンの町跡の上下が判明した。トレンチの東側は1ヶ月前から港事務所の仮機材置場建設を始め、トレンチ際まで敷地境フェンスを張っている。トレンチ内清掃。15日、トレンチ内20世紀末埋土の除去再開。16日埋土除去。18日、シャルジャ博物館長が遺跡に来る。ディバDibaの遺跡を4カ所見に行く。農園Farm内遺跡(N25,36,37, E56,15,45)は以前マウンドがあったというが、現在は平坦な畑で、中国やミャンマーの14~15世紀の青磁、中国の明清の染付が地表面で採集できる。すでに遺構は攪乱・

破壊されている可能性があるが、遺物を採集するには適した場所である。19日、埋土除去。20日、ブルドーザーの手配ができ、Department of Transport and maintenance, Khorfakkanの職員がトレンチ周辺に盛り上げた廃土を他の場所に移動する。21日、埋土下に壁が発見される。壁は1段に敷き詰められた石積平坦面の上に載る。石積平坦面の下にはピンク色土が広がり、どちらからも土器片が出土する。ピンク色土のほうが広い範囲に見られる。その下に灰色の汚れた灰混じりの土があり、貝殻や土器片がかなり多く含まれ、灰やゴミが捨てられた生活廃土である。22日、ブルドーザーで廃土の山を除去する。23日、ピンク色土のなかで石積み壁を発見。25日、灰色土から15世紀の陶磁器が出土し、それ以外の時代のものは出土しない。26日、ピンク色土の下は砂層である。27日、一時強い雨。28日、一時雨。ピンク色土は壁崩れ土で、石積み面をきれいに同じピンク色土で塗りしている。外壁は90cmで厚く、内の仕切り壁は40cmである。29日及び30日はブルドーザーとダンプカーで盛り上げた土を遺跡周辺から運び出す。発掘区域は東西方向が40m、南北方向が30mの長方形となり、区域内砂上面は16世紀初めの時代になると推定できる。2つのコーナーが現れ、東側家の大きさが推測できる。2005年1月2日、東側から10mまでを掘り下げることとする。3日、東家と北東家の壁基礎を発掘する。東家をHouse 1、北東家をHouse 2とする。4日、House 2の南側家壁を新しい家壁下で発見。5日、House 1, 2の壁及び室内堆積土を掘る。6日、House内の発掘。8日、House 1室内発掘、赤色土内からかなりの土器が出土する。9日、室内床面を出す。10日、シャルジャ博物館職員とシャルジャテレビが遺跡に来る。遺構撮影を行う。作業員パキスタン人や関係アラブ人とテント内で昼食パーティを開く。11日、コールファッカンを朝発ち、シャルジャ国立博物館で挨拶し、機材及び出土品を保管。12日帰国。

第4次発掘調査は2005年12月から2006年1月に実施した。12月8日日本発、10日朝シャルジャ国立考古学博物館で調査打ち合わせ後、コールファッカンに移動し、発掘を始める。パキスタン人作業員14名が遺跡内にテントを張り調査期間中住む。作業員は20名を募集したが、14名のパキスタン人作業員及び見張り人1名が集まる。不法労働の取り締まりは厳しくなり、短期間の作業員を雇用することはかなり難し

くなった。作業員の勤務時間は8時間以内。作業時間は6:45-9:30分、朝食9:30-10:00、10:00-12:30分、祈り時間12:30-13:00、13:00-14:45。作業員の朝食作りは1時間ほど前に作業員2人が用意する。木曜は12:30終了、金曜は休日。トレンチ内北西側のHouse 3を中心に発掘する。12月12日明け方のみ雨が降るが、日中は調査期間中降雨なし。12月18日、6名のパキスタン人を追加し、作業員は20名となる。作業員朝食作りは2カ所となる。12月19日、House 3上に広がるレベル1石敷き面の平面実測・撮影を終える。12月21日、レベル1石敷き面を剥ぎ取り、発掘区域全面がほぼレベル3となる。House 3東側壁下に土器大瓶2点が立てて埋められているのを発見する。House 3以前のタンヌールで、大瓶の上に家壁基礎の石が載る。遺物の混じる灰砂層の上に同時期の家が建てられている。12月24日、House 2の床面の赤色土を削ると、柱穴跡が数カ所で発見される。床面赤色土内からも陶磁器や貝殻などの破片が出土する。House 2は道路側の壁に沿って柱が建つ部屋があり、部屋の西側に石敷き面がある。室内は砂上に赤色土を薄く張り、作業場所には石を敷き詰めたか。12月26日、House 3の家石積み壁基礎がほぼ明らかとなる。House 3は砂地面に小石を置き、その上に石積み壁を築く。ゴミ混じりの灰砂層が家の周辺にほぼ水平に堆積した後、灰砂層面を基盤として石積み壁を作る部分がある。House 3としたのは増改築した新しい部分の家であることが明らかとなった。House 2でも同様のことがあったようである。古い壁の直上に新しい壁を作るようである。12月29日、House 2の床面よりも下の灰砂層内から小さな真珠が数百個発見される。1mm方眼の網を用いて砂を篩う。真珠はいずれも同じ大きさである。表面は黄色に変色し、表面のみ残り内部は空洞となるものが多い。12月30日、午後雨。12月31日、昼頃から午後にかけて強い雨。2006年1月3日、建物跡実測及び撮影を終える。建物に接する部分でいくつかの土器使用炉及び土器利用パン焼きカマドを発見する。1月4日、出土した土器や貝殻を遺跡内に保管し、発掘区域周辺に石を積み、登録出土品をシャルジャ博物館に運ぶ。発掘機材はフジエイラ博物館に保管。6日ドバイ発帰国。

第5次発掘調査は2006年12月から2007年1月に実施した。12月8日日本発、9日ドバイ着06:10ロターナホテル泊。シャルジャ国立考古学博物館長サバ・アブド・ヤシムと調査打ち合わせ。10日朝シャルジャ

国立博物館からコールファッカンに移動する。フジエイラ博物館に保管していた発掘機材をとり、遺跡で発掘作業員と会い、コールファッカンのOceanicホテル泊。2006年10月からアラブ首長国連邦の休日に変更され木金から金土となる。発掘休日は昨年同様に金曜のみとする。パキスタン人作業員10名が遺跡に隣接する地に調査期間中テントを張り住む。すでに発掘した家跡の細部点検及び家跡外に広がる灰色砂層に点在する炉とゴミ穴を発掘し、ピットごとに遺物を集める。作業員の勤務時間は8時間以内契約で、作業時間は6:45-9:30、朝食9:30-10:00、10:00-12:15、祈り時間12:15-12:45、12:45-14:45とする。作業員の食事は警備・コック兼用のパキスタン人が用意する。

家跡の点検成果は3点ある。House 1では西側中央に出入り口を発見した。House 2では南側に小さな部屋を確認し、室内堆積層からまとまって廃棄された陶器片を採集した。House 3では北側に延びる石壁、西側外で竈と炉を併設する台所を発見した。台所の西南にあるWater tankも掘りあげた。

House 3の西側室内では3層に分かれる石壁が残り、改築の多さを推定できる。砂面に石を置き壁を作るのが一般的であるが、石壁下にゴミ混じり灰砂層が堆積し増築を示す例もHouse 2とHouse 3で発見された。増改築が頻繁であったことが推定できる。House 3西南側の台所仕切り壁も灰砂面上に築かれており、現在残る仕切り壁は最終のものとなる。

家跡群の南側に広がる広場は第3層とした灰色層で、家跡はないが炉とゴミ穴が点在している。家跡の外側には炉が点在し、多くのゴミ穴も集中して掘られている。ゴミ穴のなかには細片となった魚骨や陶磁器片などが多く混じる。多くの陶磁器片は接合しないから、すでに廃棄されたものがゴミ穴のなかに再廃棄されている。ゴミ穴と炉の存在は14世紀中頃のジュルファール遺跡第7層の砂層と類似しているが、コールファッカンには石積み家跡の居住者が家外の炉を用い、その周りにゴミ穴を作ったことが異なる点である。ジュルファール第7層砂層は砂面に柱穴跡を残す家内に炉を作り、家外にゴミ穴を掘っていた。

House 1。道路に面する外壁の長さは16m50cmで、両側の壁コーナーが発見された。2つの部屋に分かれ、南側の室は出入り口が判明し、約1mの幅で南側外壁角から4.70m～5.65mの部分にある。壁の厚さ



は90cmほどある。入り口が発見された南側室の内壁長さは6.80m×2.90mで室内面積は19.7㎡である。

House 2. 東南部で発見された石積み壁で囲まれた小さな部屋は、南側壁が厚く90cmあり、室内が3.2m×1.6mで、僅かに5.1㎡である。東側の道路に小さな出入口がある。

House 3. House 3は砂地面に小石を置き、その上に石積み壁を築く。ゴミ混じりの灰砂層が家の周辺にほぼ水平に堆積した後、灰砂層面を基盤として石積み壁を作る部分がある。House 3としたのは増改築した新しい部分の家であることが明らかとなった。

Water tankはほぼ長方形の平面210×130cmで、床面から99cmまで石壁が残る。床は砂上に白いプラスターを薄く貼る。石壁内には家跡壁と同じ赤土が詰められ、表面には白いプラスターが部分的に残存している。砂に長方形の穴を掘り、赤土を詰めながら石を積み、白いプラスターで表面を仕上げたことがわかる。内部堆積層内に石壁の崩れが含まれ、House 3の床面などからみても、現状より30cmほど高かったと推定される。この場合、最大で貯水量は3.55㎡となる。

1月3日、出土した土器や貝殻を遺跡内に保管し、発掘区域周辺に石を積み、登録出土品をシャルジャ博物館に運ぶ。発掘機材はフジェイラ博物館に保管。4日は作業員が遺跡の保護処置を行う。5日及び6日はシャルジャ博物館で展示品の検討と撮影、6日深夜ドバイ発7日帰国。

第6次発掘調査は2007年12月から2008年1月に実施した。12月19日発、20日ドバイ着、Holyday International Hotel Sharjah泊。米田豊明・早苗さんに会い、夜はシャルジャ国立考古学博物館長サバ・アブド・ヤシム氏宅で調査打ち合わせ。21日シャルジャからコールファッカンに移動する。Masafiで昨年春に発掘したMasafi砦を見る。フェンスで囲まれ、発掘当時のまま保護されている。Sharjah博物館及びMleiha倉庫から日本隊Sharjah領内遺跡発掘資料をDibba dig houseに博物館員がすでに運んでいる。Dibba dig houseから出土品を除き、発掘用具の一部をコールファッカンOceanicホテルに運ぶ。発掘休日は昨年同様に金曜のみとする。パキスタン人作業員が遺跡に隣接する地に調査期間中テントを張り住む。家跡外に広がる灰色砂層に点在する炉とゴミ穴を発掘し、ゴミ穴ごとに遺物を採集することが発掘の主要な目的である。作業時間を6:30-10:00、朝食は作業

員が夜に多く食べるため10:00-10:30と遅くし、10:30-12:15、祈り12:15-12:45、12:45-14:30とする。作業員の食事はコック・警備のパキスタン人1人が従事し、発掘は11人ほどの予定。22日はコールファッカンに住むパキスタン人12人をインド人1人が朝連れてきたが、労働許可証を持っていないのですぐ帰る。日本人3人が発掘。23日は昼頃にコールファッカン市役所のAhmad Saeedが来て、パキスタン人作業員の手配をすることにしたが、その直後にディバからパキスタン人作業員9人が到着する。ディバで発掘をしているグループだから、彼らと発掘することとする。本日は日本人3人とパキスタン人1人が発掘。24日、すでに数日前からテントにいたパキスタン人作業員2人とディバからの9人合わせて11人がテントに住み、本日からパキスタン人10人が発掘に参加し、1人は作業員の食事係。25日、26日、27日は第3層灰色砂層の表面を薄く剥ぎ、ゴミ穴と炉を発見する作業と、発見した一部のゴミ穴を半分掘る作業を続ける。28日は金曜日で休み。ディバdig Houseに行く。29日、ディバから来た作業員は祈り時間後、ディバに帰る。30日、ムレイハから来たパキスタン人12人とインド人2人が朝から作業を引き継ぎ、他の1人は食事兼警備係。31日もピット発掘を継続する。

2008年1月1日(火)休み。前日までの出土品をDibba dig houseに移動する。ベッドにシーツ、枕、毛布を備え、衛星テレビ、冷蔵庫、洗濯機、電話、インターネットが揃い、宿泊できる状態になった。2日、3日はピットの発掘。4日は金曜日で休み。米田豊明・早苗さんがコールファッカンに来る。Dibba dig houseに図面用紙を取りに行く。5日(土)はピットの発掘、水タンク内の掘り下げ途中でセクションに沿って残りの良いクッキングポットが出土。6日(日)昼頃今シーズン初めての雨が降り、発掘を早く止める。7日(月)は強風で砂嵐となり、山も霞んで見えない。8日(火)は寒い日。他の日は日中暑い。9日(水)はピットの発掘、夕方ディバに出土品を運ぶ。10日(木)はイスラム新年で発掘を休み、アライン博物館でワリッドユーセフとアブダビ調査打ち合わせ。11日は金曜日で休み、時々雨。12日(土)はピットの発掘を続けるが、早朝雨で8時から開始。13日(日)は朝から雨で日中も一時的に雨が続き、雨の合間にピット発掘を続ける。10時から作業員テントで魚と鶏のフライ、米と野菜ヨーグルト、芋カレー、生野菜で食事。花江は発掘後ホテルからパズル

ハンの車でHolyday International Hotel Sharjahに行き、翌日ドバイから帰国。14日（月）は時々雨、ピット発掘。15日（火）は雨、発掘最終日とし、すべての出土品を遺跡からディバに運ぶ。16日（水）は午前のみ小雨、午後雨は止み、6日間の雨終わる。午後、遺跡の実測図修正及び作業員2人にハシゴを持たせ発掘区全景と個別ピットの撮影。17日（木）晴。18日（金）ディバdig Houseに寄ってからHolyday International Hotel Sharjahへ、19日（土）ドバイ発帰国。1月中旬は雨が降るため、11月末から12月末の調査が望ましい。

家跡群の南側に広がる広場は第3層とした灰色層で、家跡はないが炉とゴミ穴が点在している。家跡外側の周辺に粘土製炉が点在し、ゴミ穴は全面に見られるが、家跡から離れると数は減る。ゴミ穴のなかには細片となった魚骨や陶磁器片、貝殻などが混じる。ヤギヒツジの骨はほとんど見られない。多くの陶磁器片は接合しないから、陶磁器はすでに廃棄されたものが再廃棄されている。魚骨や貝殻は直接にゴミ穴に廃棄された状態も見られる。ゴミ穴は何度も掘られ、1つのゴミ穴を発見して掘り始めると、隣や下方から別のゴミ穴の表面が発見され、他のゴミ穴が半分壊されて発見される状態である。炉は粘土製が家に近い位置で発見され、石組炉はゴミ穴と同じ範囲で発見される。ゴミ穴の広がる範囲に黒灰も多く見られる。黒灰は発見時に大きな円形や楕円形に見え、10cm以内の薄い層であるため、少し掘り下げると小さなシミがいくつか集まっているように見える。貝殻や灰が捨てられ薄く堆積し、何度も穴が掘られるため、生活層は自然砂層よりも汚れた灰色砂層となる。

発掘区域の西側部で2つめの水タンクが発見された。水タンクBは割石を12段積み重ね、赤色粘土を石の間に詰めている。12段目の外側周囲に幅20数cmの平坦な粘土面があり、この面が使用面と推定できる。

シャルジャ首長国考古局のDr. Sabah Aboud Jasim、シャルジャ首長国博物館のEssa Abbas Husain、Cheryan、コールファッカン市役所のAhmad Saeed、ディバ市役所のKhalid、コールファッカン高校のMohmad Khamis bin Abood氏らにお世話になった。

## 発掘区域

コールファッカン砦測量調査と併せて、砦西側に

広がる平坦面の第1次発掘調査を2001年12月から2002年1月まで行い、第2次発掘調査は2003年12月から2004年1月に実施した。第1次発掘調査でコールファッカン砦中央塔中心点から西へ150m、その地点から南に90mのA点とさらに40m南のB点に基点を設けた。A点とB点の長さ40mを基線とし、西側に幅2mのトレンチを遺構と層位の確認のため設定し、A点から南10mからB点を結ぶ30×20mの発掘区域をトレンチ西側に設定した。30×20mの発掘区域の北東部はN25,20,29, E56,21,45である。ただし、第2次発掘調査時点で発掘区域の鉄杭がすべて抜き取られていたため、新たに基準ポイントの設定を行った。その結果、第1次調査トレンチは南北方向から16度西側に振れていることが判明した。測量者の計算違いであった。しかし、既に発掘を実施しているので、南北枠線を西側に16度振れたままとし、前年とほぼ同じ発掘区域位置を再設定した。30×20m発掘区域の北東側の点はA点から3.45m南東南方向に変更した。また、第1次発掘調査時点のトレンチ東側枠線を東方向に30cm移動した。砦との位置関係は図示した通りである。

30m×20m発掘区域の東北地点とし、発掘区域は600㎡である。発掘区域東北地点を1aとし、その西南の10×10mの範囲を1a区とした。南東南方向に10mの点を2aとし、その西南区10×10mを2a区、さらに同様に3aと3a区とし、1aから西南西側10mの点を1b、南東南に10mの点を2b、さらに西南西10mの点を3bとし、それぞれ10m区画を1b区、2b区、3b区として10m区画を6区設けた。発掘区域内東側に40mトレンチの30m部分が含まれる。1aの緯度経度はN 25,20,29 E 56,21,45、4aの緯度経度はN 25,20,28, E 56,21,45である。発掘区域から北と南側の一部がトレンチで張り出す、表面を覆うコンクリートなどを剥がす作業に時間を取られたため、張り出し部分の発掘は一部で終了した。

標高はベンチマークを発見できなかったため、等高線図に記された周辺の山頂標高を基準とし、コールファッカン砦の等高線図を作成した。基準とした山頂標高より100mほど下の発掘区域内の標高もそれを利用した。第3層の砂地生活面はほぼ12mとなる。コールファッカン港湾内の2008年1月16日最高水位を測定すると9mとなった。1988年に始めたジュルファール遺跡の発掘では、潮の満ち引きの中間高さを仮に海拔0mとして遺跡測量を行った。その後、

海拔が判明し、+0.9mすることとなった。ペルシア湾とオマーン湾の水位は同じではないが、アラブ首長国連邦の海拔は同じ基準を用いている。ジュルファール遺跡の経験を参考にすると、満ち引きの中間高さよりも海拔0mは1mほど高い。そこで、コールファッカンでは2008年1月の最高水位を0mとして遺跡の標高を示すこととした。山頂基準を-9mして変更すると、レベル3の地表面は12mから3mへと変更になる。

満ち潮時には発掘地点のレベル3地表面、すなわち当時の生活面は海面から3mの高さに過ぎない。レベル3の最初の生活は満ち潮時の海面から2.5mほどの砂浜で始められたことになる。

#### トレンチ内層位

トレンチ内には0.5mから1mほどの厚さで1997年の港造成用コンクリートの場として使われた跡が残る。コンクリート材料であるセメント、砂利、砂が層位をなしている。その下には数人でも持ち上げられない大きさの切石が大型車を通す道路として敷かれた場所がある。壁石、土砂、砂、壁土が移動されて堆積する場所もある。これらの層を表土とした。表土下にはピンク色壁土を主とする層位があり、上層をレベル1とした。レベル1は石壁内に詰めた泥モルタルの白い貝や石灰岩の細かな粒が混じるピンク色泥モルタルが石壁基礎付近で発見された。家部分から少し離れると砂が堆積する部分もあった。一抱えほどの石が壁基礎石として積み上げた状態が残る。石壁の下の面はゴミが広がる面である。厚さは4~5cmほどで薄い。このゴミ層とそれより下の層をレベル2とした。2002年1月に終了した第1次発掘トレンチはこの面の最上層であるゴミ面で終了した。

#### レベル1

砂層下またはピンク泥モルタル層位と同じレベルで数軒の家壁基礎部分が現れた。Mud brickが崩れたピンク色粘土の堆積である。この堆積土内に家壁基礎が残る。石や珊瑚を泥モルタルとともに積み、家壁としている。現在もコールファッカン市内で壊れかけて残る家と同じ材料を用いた造りである。

第1次発掘調査のトレンチ内で、同じ家のいくつかの部屋と思われる石積み壁基礎が現れた。黒く焼けた炉、その近くに擦り石なども発見された。土器片や陶器片がまとまって出土する場所もあるが、数量は多くない。

#### レベル2

レベル1の石家壁の下にレベル2がある。第1次発掘調査トレンチ内では、アサリ貝殻を主とするゴミ層があり、灰も混じる。その表面から土器と陶器の小破片が少し、ガラス・バングルが1点、ガラス小容器1点等が出土した。すでに小さく割れた一部が残る状態である。レベル2のゴミ層の上に石壁基礎の家が建つ。

#### 第3次発掘の層位について

地表面から1.5mほどは最近の堆積土である。第2次調査で設定した30×20mの発掘区域を西側方向に30×40mに広げ、最近の堆積土を除去する。

埋土下で最初に発見された石積み壁家の基礎部をレベル1とする。壁のない部分は貝や土器片が混じる灰砂土の堆積である。壁基礎下に割れて尖った石塊を平面形長方形に平坦に敷いた部分があり、石塊層及び石塊が載る砂層をレベル2とする。レベル2は薄い層であるが、下部にレベル3の家跡がある部分では厚くなる。灰混じり砂の層の表面に1段石塊を敷き詰めているため、灰混じり砂もレベル2とする。その下は赤色土が広がる部分と灰砂層が広がる部分があり、赤色土の広がる部分には石積み壁が残る。その家の壁が残る層をレベル3とする。赤色土は白い石灰粒を含む壁土の崩れ堆積である。灰砂層には牡蛎貝殻片がまんべんなく含まれ、その他の貝殻や多量の土器片も含まれる。レベル3の生活廃棄物の堆積層である。レベル3の下は水平堆積した砂で、砂には貝殻が水平堆積している。

レベル2の灰色土から15~16世紀の明染付やマンマー青磁が出土し、それ以外の時代のものは出土しない。レベル3の紅色土からは14世紀の元染付や15世紀の染付・青磁が出土し、レベル3の灰砂層からは15世紀を中心に16世紀までの陶磁器が出土する。クッキングポットもジュルファール遺跡の種類に対応し、出土品は14世紀後半から16世紀のなかに入ること示している。レベル3家跡周辺には紅色土がわずかに薄く堆積するが、その周辺及び下には灰砂が堆積する。レベル3の生活層である。灰砂内には牡蛎貝片が目立つが他の種類の貝殻も含まれ、土器片は多い。魚骨片は多いが、羊/山羊及び鳥の骨はきわめて少ない。同じ時代のジュルファール遺跡や少し前のルリーヤ遺跡と比べ、動物・鳥の骨がきわめて少ないことが特徴となる。

レベル2の廃棄物はレベル3の生活廃棄物を含む灰砂層と同じものであり、レベル3の家跡が廃棄さ

れてから、レベル3家跡の上に堆積したとわかる。レベル2の出土品はレベル3の上層部廃棄物を多く含む移動した層と推定できる。レベル1は出土品から20世紀前半が中心と推定できるため、レベル2はレベル1の家を建築する際に地ならしした層と解釈できる。発掘地点は4世紀ほどの居住空白期間があったことになる。

### 出土品

2003年12月～2004年1月、第2次発掘調査出土品。表土出土品。表土からは小さく割れた土器片が多く出土する。ミャンマー青磁盤片も数点出土し、中国青磁盤15世紀頃の破片も1点出土したが、多くは20世紀の製品である。

レベル1出土品。レベル1の泥モルタルと同じ層位で、地表面から120cmの深さで、1920年インド製コインが出土した。パキスタン作業員は1960年始めまで使用したという。同じ層位から錠が出土した。また、石積み壁際から土器片がややまとまりをもって出土する場所があった。緑釉陶器鉢片もいくつか出土した。ジュルファール遺跡出土品と同系統の緑釉陶器であるが、釉は斑になり、ジュルファール遺跡出土品よりも新しいと思われる。口縁部外側まで釉がかかり内面は全面に施釉され、口縁部内面に受け部が巡る一般的な型式である。形だけを見るとジュルファール遺跡出土品と同様に見える。パキスタン人は同様の製品がペシャワールで造られるといい、釉色の濃いものは半世紀ほど古いという。土器ランプ。1点のみ出土。

レベル2出土品。レベル2のゴミ層最上部の貝混じり層から数量は少ないが土器、陶器片が出土した。2004年12月～2005年1月、第3次発掘調査出土品。

上層及び上下層混じりの土砂から出土した陶磁器はほとんどが15～16世紀のもので、17世紀以降の陶磁器はほとんどない。出土した土器の重量は71.514kg、施釉陶器Glazed wareは中国染付Chinese blue and white,0.097kg、中国青磁Chinese green ware,0.479kg、ミャンマー青磁Myanmar green ware,0.838kg、イスラームIslamicの緑釉陶器green glazed ware,3.60kg、白濁釉陶器Opaque white ware,1.311kg、褐釉陶器green glazed ware,0.805kg、緑釉下褐彩陶器green glazed ware underglaze painted brown (pink素地),0.12kg、灰緑釉陶器grey green glazed ware,0.122kg、淡緑釉陶器pale green glazed ware,0.068kg、緑釉陶器green glazed ware,0.03kg、黄

釉褐彩陶器yellow glazed ware underglaze painted brown,0.038kg、マンガ黒釉陶器manganese black glazed ware (pink素地),0.09kg、緑・紫彩陶器green and purple glazed ware,0.03kg、stonepaste染付blue and white,0.0073kg、stonepaste緑釉下黒彩陶器green glazed ware underglaze painted black,0.01kgである。

レベル2はレベル1の家壁下に接して広がる割石堆積面とその下の灰砂層である。レベル1の家壁下に部分的に広がる面であり、レベル3の赤色壁が崩れた赤色土の上に広がる。レベル1及びレベル3の家は上下で重なる部分が多いが、その間に堆積する石敷き面と灰砂層である。家跡が無い部分はレベル2を確認することが難しく、レベル2とレベル3は区別しにくい。House 1の上に広がる石敷き面及び直下の灰砂層は明確に分類できたため、一部の出土陶磁器の種類と重量を記す。土器Earthenwareは、yellow素地 (Vaseが主) が3.86kg、red coarse素地のcooking potが1.55kg、red coarse素地のJar/vaseが0.82kg、red coarse素地の白スリップ上赤色彩文土器 (Vaseが主だがbowlもある) が0.41kg、red coarse素地の蓋が0.22kg、この他にpink/gray素地で赤色面に叩き文がある薄手の土器 (Jarのみ) が0.02kgである。中国青磁Chinese green ware,0.05kg、ミャンマー青磁Myanmar green ware,0.01kgである。イスラーム陶器は、緑釉陶器 (ピンク素地) green glazed ware,0.80kg、褐釉陶器 (ピンク/灰色) brown glazed ware,0.11kg、白 (濁) 釉下黒彩陶器 (yellow and pink素地) opaque white glazed ware, underglaze painted black,0.56kg、白 (濁) 釉下緑彩陶器opaque white glazed ware, underglaze painted green,0.01kg、緑釉下白彩陶器 (ピンク素地) green glazed ware, underglaze painted white,0.05kg、透明釉下黒彩陶器 (red and yellow素地) transparent glazed ware, underglaze painted black,0.09kg、その他の施釉陶器0.02kgである。この結果からレベル2はレベル1の出土品と異なり、レベル3の出土品と同じ種類と組み合わせであり、レベル3の時代15～16世紀と同じであることが判明した。

また別の日にHouse 1上のレベル2から出土した土器は6.95kgである。北東側house 2のGray層から1日に出土した陶磁器は土器Earthenware,6.15kg、施釉陶磁器glazed ware,0.36kgで、94.5%と5.5%である。施釉陶磁器glazed wareのみの内訳はミャンマー青磁Myanmar green ware,0.09kg (25%)、中国青磁Chinese green ware,0.05kg (14%)、イスラーム陶器Islamic

glazed ware, 0.22kg (61%) である。イスラーム陶器の内訳は緑釉陶器green glazed ware, 0.06kg (17%)、褐釉陶器brown glazed ware, 0.05kg (14%)、その他の種類0.11kg (31%) である。

レベル3のGray層出土の土器Earthenwareは230.955kgである。中国青磁Chinese green ware, 0.741kg、中国染付Chinese blue and white, 0.18kg、中国白磁Chinese white ware, 0.01kg、ミャンマー青磁Myanmar green ware, 1.26kg、ミャンマー白濁釉陶器Myanmar opaque white glazed ware, 0.02kg、タイ青磁Thai green ware, 0.62kg、ベトナム青磁Vietnamese ash glazed ware, 0.02kgである。イスラーム陶器Islamic wareは緑釉陶器green glazed ware, 9.357kg、白濁釉陶器opaque white glazed ware, (underglaze painted black or blue) 4.256kg、褐釉陶器brown glazed ware, 1.594kg、灰緑釉陶器gray glazed ware, 0.147kg、透明釉下白彩陶器transparent glazed ware, underglaze painted white, 0.148kg、透明釉陶器transparent glazed ware, red fabric, 0.93kg、透明釉下彩画陶器(イラン染付stonepaste) transparent glazed ware, underglaze painted black or green or cobalt blue, 0.312kg、紫釉陶器purple glazed ware, 0.4kb、その他1.79kgである。

Red層出土の土器Earthenwareは20.20kgである。House 1の壁を出すために壁周囲の赤土・灰砂・砂を掘り下げた層から出土した土器Earthenwareは23.55kgである。

House 1の室内に堆積した赤色土から出土した土器Earthenwareは35.34kgである。

なお、第3次発掘で出土した陶磁器のうち、段ボール2箱分の陶磁器は未整理のままシャルジャ国立博物館に保管中で、実測、撮影、計量を行う予定である。

文字を記した陶器片が1片出土した。House 1の室内赤土内から出土したイラン製と推定されるピンク素地瓶胴部片の白スリップ上に「□ from Larki」とアラビア文字が刻まれる。イランのラルキ/ラルクから運ばれた瓶と推定することが可能であり、Larkiは現在のホルムズ島である。瓶の内容物が記載されていたと思われるが、その部分は欠損している。

2005年12月～2006年1月、第4次発掘調査出土品。

第3層灰砂層から出土した陶磁器はほとんどが15世紀であり、前年度の出土品とはほぼ同じ種類と組合せである。出土した土器の重量は363.23kg、施釉陶器Glazed wareは31.72kg、内訳は中国陶磁器2.07kg、

東南アジア陶磁器(タイ陶磁器kg、ミャンマー陶磁器kg) 0.96kg、イスラーム陶器(イエメン陶器、イラン陶器、中央アジア陶器) 28.69kg。土器92.0%、中国陶磁器0.5%、東南アジア陶磁器0.2%、イスラーム陶器7.3%である。施釉陶磁器のなかではイスラーム陶器が90.4%、中国陶磁器が6.5%、東南アジア陶磁器が3.0%を占める。中国と東南アジア陶磁器が施釉陶磁器のなかで9.6%を占めるのは高い割合であり、貿易港遺跡の特色を示している。

中国・東南アジア陶磁器Chinese and Southeast Asian Ceramics。中国染付Chinese blue and white, 0.??kg、中国青磁Chinese green ware, 0.350kg、中国白磁Chinese white ware, 0.??kg、中国色絵磁器Chinese enamel ware, 0.??kg、中国褐釉陶器Chinese brown glazed ware, 0.??kg。ミャンマー青磁Myanmar green ware, 0.18kg。タイ青磁Thai green ware, 0.??kg、タイ鉄絵陶器Thai iron painted ware, 0.??kg。

イスラーム陶器Islamic ware。緑釉陶器green glazed ware, red fabric (pink素地)は13.130kg。白濁釉陶器Opaque glazed wareは6.540kg、白濁釉黒彩陶器もわずかな量であるが白濁釉陶器に含む。褐釉陶器brown glazed wareは3.680kg、黒釉陶器black glazed wareは1.15kg。淡青釉陶器pale blue+green glazed ware (pink素地が主、yellow素地も含む)は3.230kg。淡青釉陶器の重さに灰緑釉陶器grey-green glazed ware、淡緑釉陶器pale green glazed ware、緑釉陶器green glazed ware, yellow/pink素地、緑釉下褐彩陶器green glazed ware underglaze painted brown (pink素地)の重さを含む。青緑釉陶器blue/green glazed wareは0.01kg。黄釉褐彩陶器yellow glazed ware underglaze painted brown (pink素地)は0.19kg。黄釉下刻線文陶器スグラヒアトYellow glazed ware underglaze incised(pink素地)は0.01kg。マンガン黒・紫釉陶器manganese black glazed ware (pink素地)は0.04kg。緑・紫彩陶器green and purple glazed wareは0.??kg。Stonepaste陶器は0.710kgで、白濁釉陶器opaque glazed ware、青釉陶器blue glazed ware、透明釉下染付blue and white、透明釉下青・黒彩陶器transparent glazed ware painted blue and black、淡青釉下黒彩陶器pale blue glazed ware underglaze painted black、青釉下黒彩陶器blue glazed ware underglaze painted blackがある。

第3層灰砂層から出土した貝の出土量は649.69kg。牡蛎殻が重さで69.2%を占める。その他で食用となるのはヒオウギ貝、ハマグリ、アサリ、サザエ、ア

カ貝、ニシ貝、ツブ貝、アコヤ貝、小さな巻貝である。

第3層灰砂層から出土した魚骨の出土量は2.00kg。甲烏賊骨の出土量は1.41kg。貝殻に比べると少ないが、魚脊椎骨と甲烏賊骨を合わせると、動物や鳥の骨よりわずかに多い。わずかだが鱗もみられる。

第3層灰砂層から出土した動物骨の出土量は3.40kg。大型動物の骨、あるいは大きな骨はきわめて少ない。大きな骨は切り裂いて細片にしたのだろうか。山羊/羊の骨は少ないが、ラクダと羊の歯が少量出土している。鳥骨の出土量はきわめて少ないが、細く小さな鳥骨が数個体分まとまって出土している。動物骨のなかに鳥骨も含めて計量した。

第3層灰砂層から出土した真珠は？個、0.??kg。大きさは長径5mm、短径4mmが多く、ほぼ均一サイズの小真珠である。表面は黄色に変色し、内部は腐食して空洞になったものが多い。小穴が1つ開く。貫通していないからビーズとして加工したものではない。同じ場所から多くまとまって出土する傾向があるが、灰砂層内に散らばっており、遺構に伴うものではない。灰砂層はほぼ水平に堆積し、黒灰が薄く広がる小さな炉が継続して使われたが、真珠は炉に伴うわけでもない。砂を篩いにかけて小さな石や貝殻小片、魚骨などと共に真珠が発見される。

第3層灰砂層から出土したガラス容器片の出土量は0.45kg。きわめて少ない。小さな瓶が主で、黒い吹きガラスが主である。

第3層灰砂層から出土したガラス・バングル片は？片、出土量は0.11kg（計量・撮影後に3点出土した）。

第3層灰砂層から出土したガラス・コールスティック片は？片、出土量は0.??kg。

第3層灰砂層から出土した青銅製コールスティック片は？片、出土量は0.??kg。

第3層灰砂層から出土した青銅製リング片は？片、出土量は0.??kg。

第3層灰砂層でHouse 3の壁下周辺から出土した青銅製蓋と思われる円形盤は、径12.3cm、重さ200gで、中央部がやや厚くなり、中央がわずかに高くなる。

第3層House 2の赤色土床面から、赤色珊瑚ビーズ1点、青釉をかけた陶器ビーズ1点、青銅製リング1点、ミャンマー青磁片などが出土した。

第3層灰砂層から、黄色ガラスビーズ1点、赤色

珊瑚ビーズ1点、???が出土した。

青銅コインが土層清掃中に1枚出土した。出土地点は写真に記載。青銅コインが第3層灰砂層から1枚出土した。

第3層灰砂層からPounding stone,300g、Pounding stone,710gが出土した。ともに上部は欠損している。

第3層灰砂層からカーネリアン原石が削がれた状態で出土した。白瑪瑙の小さな割れた原石も出土した。

### 発掘遺構

家跡が発掘された。レベル1では東側と東北側で道路を挟んだ両側で家跡が発掘された。道路の西側に1軒（西家）、道路の東側に1軒（東家）、その南側に1軒（南家）を確認できる。いずれも石積み壁で赤色土を詰め、壁幅は45cmである。西家と東家の間の道路幅は北側で3.0m、南側で3.5mである。レベル1の家面付近の出土品は20世紀前半からのものであり、家跡もその時代と推定できる。パン焼き竈として利用されたドラム缶が壁際に3つ並んで発見され、20世紀後半まで家が使用されたと推定できるが、この家跡の上部に新家があったかどうかは確認できない。発掘地点でどの面まで20世紀末に削平されたか不明である。

レベル2は上面がほぼ平坦になるように敷き詰めた石塊面である。レベル1の家壁基礎がある場所の一部にのみ見られ、平面形はほぼ長方形となる。石塊面は1段の部分と数段になる部分がある。数段の部分でもきちんと積んでいるのではなく、灰砂の窪んだ部分に投げ込んでいるように見える。レベル1の家を建てる際に地面を平坦にするために石を馴らしたように見えるが、ほぼ平面形となる理由はわからない。石積み平坦面を居住・作業場として利用した可能性はある。石塊の下は灰砂が堆積しているが、傾斜した部分が多い。家壁はレベル2に無い。レベル2の出土品はレベル3の時代のものであるが、レベル2表面の石積み面はレベル1の時代と解釈できる。

第3次発掘調査でレベル3では石積み家2軒を発掘した。東側のHouse 1はほぼ発掘を終え、北東側のHouse 2は東側部を発掘した。レベル3の家の上層には少しずれる程度でほぼ重なるようにレベル1の家跡がある。House 2の上にあるレベル1の家は、House 2の崩れた赤色土壁の上に壁基礎を置いた部分があ

り、赤色土が無い部分は灰砂の上に石塊を敷いた上にレベル1の家壁基礎がある。発掘区域内の中央部及び西側部には赤色土と壁石が数カ所に見られ、数軒のレベル3家跡の存在がわかる。レベル3の未発掘家跡は第4次発掘で調査した。

House 1の壁基礎は砂地上に置かれる。外壁の厚さは90cmである。内側の仕切り壁のように見える部分は厚さ40cmであるが、壁の崩れの可能性が高い。壁は基礎部が石積みで、石の周りの詰め土と表面の上塗りと同じ赤色土を用いる部分が多い。上塗り壁が発掘中に崩れた部分では上塗り部厚さが数cmで、その中はすべて砂が詰まっていた部分がある。砂が日干砂レンガであるかどうか不明瞭である。赤色土内には白い粒の石灰が含まれている。崩れた赤色土の一部に日干赤色土レンガが確認できた。目地として砂が利用されているため、赤色土がレンガであると確認できた。壁部分では赤色土が連続しており、目地に砂が使用されておらず、赤色土を目地に使用したか、レンガではなく泥塊を積み上げたか不明瞭である。南北方向の外壁は長く16.50m、東西方向の外壁は短く4.60mである。室内の東西方向の幅は2.90m、南北方向の長さは15.70mである。室内面積は45.5㎡である。室内南側部の床は砂上に赤色土を薄く塗った状態である。その上に赤色土が厚く堆積していた。室内北側部は砂上に薄く赤色土を塗っており、その上に灰砂が堆積していた。2つのコーナーがきれいに削られた南側では、ともにコーナー両側部0.75m部分で厚さ5cm上塗りされ、コーナー部分で部分的上塗りは消える。そのため壁を厚くして壊れ難くしたのではなく、建物に装飾性を与えたと解釈できる。

House 2は赤色土壁で石積みであることはHouse 1と同じであるが、壁幅は50cmで狭い。東南角と東側、南側の壁部分が判明したが、西側と北側は未発掘である。

壁土として用いた赤色土は南側の山斜面表面に部分的に見え、白い石灰も同じ山斜面に粒状になっているのが見える。家壁材料は土と石を近くの山斜面から採取し利用したと推定できる。

レベル3の調査は第3次発掘で、House 1とHouse 2東側部を発掘し、House 2は西側部が未発掘であった。2005年12月に開始した第4次発掘調査でHouse 2西側部、その西側に広がるHouse 3を発掘した。発掘区域内の北側（海側）中央部及び西側部に残る赤色土部分を中心に調査し、壁石基礎部を追うように掘

った。2006年12月に開始した第5次発掘調査でHouse 2の道路際南角に小さな部屋が確認された。

家に接した部分で、灰色砂の上に赤色土を含む石が平坦に敷き並べられたところがある。ほぼ長方形となるようで、石積み赤色土壁家外の夏家、あるいは作業場であろう。

House 3壁外の北側を覆うように石敷き面がある。House 3の壁崩れ上に直接に載る部分と、間に砂が入る部分がある。石敷き面の石周囲には赤色土がなく灰色土であり、層位的にも明らかにHouse 3よりも上にあって新しい。レベル1と推定できる。新たに建物を建てた部分は古い家跡の上にあたる部分である。

House 3の西側壁に接するように短い石基礎壁があり、壁の南側に黒灰が広がるため家外の台所の仕切り壁と推定された。台所南側には厚く灰砂が堆積し、牡蠣貝片や土器片が多く含まれている。台所から捨てられたゴミが上部に堆積し、石基礎壁の下層は家のゴミが堆積した層である。

レベル3の建物群は砂地面に建ち、建物周辺の砂地面には貝殻と土器片を多く含む灰色砂が堆積している。砂地面の下は自然堆積の砂がほぼ水平に堆積している。灰色砂の上にも赤色土と石を積み重ねた壁がある。新築及び増改築の家跡である。

House 3の西南に隅丸長形状の石囲い地下施設がある。家の近くにある独立した施設であり、第5次調査で1基、第6次調査で1基が発見された。それぞれWater tank A, Water tank Bと名付けた。Water tank Aの周囲石列は割石が2列となり、積み石の間には赤色土が詰まる。石囲い内の上部には石が崩れ落ちた状態で赤色土のなかに石が含まれる。下層には石がほとんど含まれず、赤色土のみである。最下層の面に薄い白色プラスタ一面が残る。砂が現れる面が周囲石積みの基礎部であり、砂より下に石積みはない。シスターン水タンクである。内法は長径190cm、短径上面90cm、下面116cm、現存深さ96cm、水を上面までいっぱい溜めると2㎡の直方体である。内側下面のレベルは11m14cmである。

第6次調査でさらにやや大きなWater tank Bが1基、発掘区域の西側部で2つめの水タンクが発見された。Water tank Bは割石を12段積み重ね、赤色粘土を石の間に詰めている。12段目の外側周囲に幅20cmほどの平坦な粘土面があり、この面が使用面と推定できる。砂地に水が零れたようにも見える。それより外側は当時の人々が歩いて踏んだため、粘土面は

無かったのであろうか。内法は長径上面304cm、短径上面175cm、下面164cm、現存深さ145cm、水を上面まで溜めると7.5m<sup>3</sup>の直方体である。内側下面のレベルは10m64cmである。水タンク内に堆積した土砂は、下層は少し中央部が下がるが、北側から流れ込んだ土砂が水平に近い状態で堆積している。上層の堆積は北側と南側、すなわち長径に沿って赤土を詰めた石積み落ち込んでいる。周囲の壁が倒れたという状態ではなく、上から落ち込んだように見える。水タンクはオープンではなく、天井の覆いがあったことを示す石の落ち込みと推定できる。上層の土砂の堆積も北側から流れ込んでいる。

Water tank Bは大きなゴミ穴の一部を壊して作られている。Water tank Aは規模が小さく、家跡に近く、発見面は??cmほど高く、出土品もより新しい陶磁器を含むので、Water tank Bよりも後に作られたと推定できる。

2つのWater tankの間に最近の井戸が1基ある。円形石積みで、砂層を掘って石積みしているが、発見面から深さ140cmで内面も砂層となる。井戸石積み枠の下面は10m70cmほどで水タンクの底部とほぼ同じレベルである。この面で水が湧いて溜まったのであろうから、水タンクの下面でも水が湧いたのであろうか。

家跡群の南側に広がる広場は第3層灰色層で、家跡はないが炉とゴミ穴及びゴミが点在散乱している。家跡の外側周辺に粘土製炉が点在し、ゴミ穴は全面に見られるが、家から離れると数は減る。ゴミ穴のなかには細片となった魚骨や陶磁器片、貝殻などが混じる。多くの陶磁器片は接合しないから、すでに廃棄されたものが再廃棄されている。ヤギ・ヒツジ、ラクダの骨はほとんど見られない。多くの陶磁器片は接合しないから、陶磁器はすでに廃棄されたものが再廃棄されている。魚骨や貝殻は直接にゴミ穴に廃棄された状態も見られる。

ゴミ穴は何度も掘られ、1つのゴミ穴を発見して掘り始めると、隣や下方から別のゴミ穴が発見され、他のゴミ穴が半分壊されているのが一般的な状態である。炉は壊れた大型土器壺などを埋めたパン焼きカマド、土器片を粘土内に芯として入れて円形窪みとした粘土製炉が家に近い位置で発見され、やや大きな石を楕円形に並べた石組炉はゴミ穴と同じ範囲で発見される。石組炉の近くにゴミ穴やゴミ集積・堆積があったのだらう。ゴミ穴の広がる範囲には黒

灰も多く見られる。黒灰は砂面上で発見される時には大きな円形や楕円形に見え、10cm以内の薄い層であることが一般的であるため、少し掘り下げると小さなシミがいくつか集まっているように見える。炉の種類が配置される位置と対応して3種類に別れるのは、調理の仕方に違いがあるためであろう。黒灰のみが堆積する円形に掘られた穴もあるが、そのような黒灰のみが堆積する穴の数は少ない。炉の灰の多くは穴を掘らずに捨てられたと思われる。

ゴミの捨て方も石組炉の近くに捨てる場合と、溜まったゴミを穴を掘って埋める場合がある。ピット番号を付けたものには、穴とは言えない薄い堆積と、ゴミが大量に出土する深い穴とがある。

貝殻や灰が捨てられ薄く堆積し、何度も穴が掘られるため、生活層は自然砂層よりも汚れた灰色砂層となり、数十cmの厚さの堆積層第3層となる。

House 3の増築した壁下から土器を埋めて炉、パン焼きカマドとした炉が発見された。カマドの土器はジュルファールに近いワジハキールやムサンダム半島のリマで造られた大型瓶の胴部、イランの大型瓶上部が使われている。彩文土器片を炉の周辺に並べたもの、イラン土器瓶片を粘土の芯に入れたもの、土器なしで焼土と灰が砂上に堆積する炉もある。

2005年12月から2006年1月の第4次発掘調査で出土した陶磁器のうち古いものは、イラン産スグラフィアト2片、イエメン産黄釉下褐彩文陶器が十数片ある。ルリーヤ砦出土品の中心となる陶器であり、13世紀後半の年代が推定できる。コールファッカン町跡の年代はルリーヤ砦と同じ13世紀後半ころから迎えることができる。家跡は増改築の跡があり、ゴミ堆積層の上に壁を築き直しているところもある。出土した陶磁器の大半は15世紀のものである。遺跡の年代は14世紀前半から16世紀前半である。生活品の多くは土器であるが、目に付く物は中国青磁碗盤、中国染付碗盤、ミャンマー青磁盤、イラン緑釉陶器鉢であり、15世紀が中心と推定できる。ジュルファール遺跡の下層はイラン白濁釉陶器碗や白濁釉彩画陶器盤鉢が多く見られたが、コールファッカン遺跡では少ない。コールファッカン遺跡出土品はジュルファール遺跡上層とその次の年代が主となる。ジュルファール遺跡出土品が15世紀前半で終わるのに対し、コールファッカン遺跡は15世紀後半まで盛行している。2006年12月から2007年1月の第5次発掘調査でHouse 2の増築部屋内の堆積土から出土した中国



染付盤嘉成年製銘、水タンクA堆積土内から出土したミャンマー白濁釉陶器盤は16世紀の製品であるが、第3層の最終末の遺構であると推定されるから、第3層の終末年代は16世紀前半から中頃であろう。

### 発掘地周辺の地勢

発掘地点はアラブ首長国連邦シャルジャ首長国コールファッカン海岸の湾内に面する。コールファッカンのなかで最も古い町と推定しているエム・ゴバーナEm Gobanaである。コールファッカンが西部の緩やかな傾斜地に拡大した後、アル・シェルクAl Sherque東と呼ばれるようになった町である。

南側には急峻な岩山がそびえ、北側は湾内の砂浜で、西側は山麓の農園、東側は砦がある50mほどの細い山が緩やかに下がって北に延び、砦山の先端は海に突き出た円錐状岩山となる。砦東側はAl Bandarと呼ばれた小さな細長い入り江があった。砂浜ではなく岩が海に接しており、20世紀後半の写真には何隻ものダウが停泊している様子が見える。西側の入り江はDirwazahと呼ばれた砂浜で、ここにも多くの漁船が停泊している写真が残る。コールファッカンは2つの入り江という意味であり、異なる地勢の入り江を港として使用していた珍しい例となる。ただし、この状態は20世紀のものであり、それ以前に遡るかどうかの証拠はない。コールファッカンは漁船の停泊に適した静かな湾と防御しやすい岩山に囲まれた町である。21世紀初には山の削平と海の埋め立て及び町の移動で、南側の高い山を除くと昔の面影は残らない。

イブン・バットゥータは「オマーンの諸都市の一つにザキー……その他の町としてクライヤート、シャバー、カルバー、ハウル・ファッカーン、スハールがある。それらの町々のすべてには幾つもの河川、果樹園やナツメ椰子の樹木がある。そして、この地域の多くはホルムズの行政地区に含まれる。」(家島 1998 174頁)。マスカットからホルムズに至る町の名にカルバとコールファッカンが挙げられている。イブン・バットゥータが14世紀中頃に聞いた(あるいは見た)町は、筆者が発見し命名したエム・ゴバーナ遺跡であろう。「ヤークートによると、ハウル・ファッカーンは山が迫ったオマーン海岸の小規模の町(bulayda)で、ナツメ椰子の実と良質な飲料水で知られた(Yaqut, 2/488-89:I. al- Mujawir, 280)」(家島 1998 243頁)。港町として栄えたコールファッカン

は周辺に存在した港町と同様にホルムズの支配下に入り、その様相を発掘した遺構と出土品が伝えているのであろう。その後、ポルトガルの侵攻でコールファッカン町は廃墟となり、一時的にポルトガルがこの地を支配した。

ポルトガル砦はコールファッカンにも建設された。ポルトガルの地図と当時の記述を併せて推定すると、海岸の平坦面に三角形の砦が建てられ、背後に高い山があったとわかる。その地形に合う場所がエム・ゴバーナまたはアル・シェルクである。20世紀末までこの地に町があり、その家を撤去中の1994年に見た散乱する陶磁器片は20世紀のものであった。それらの家を撤去後に表面に石塊混じり土が厚く敷かれたが、その土と石の中から採集した陶磁器には14～15世紀の中国青磁や染付、ミャンマー青磁が多く含まれるので、16世紀初ポルトガルが来る以前からここに町があったことがわかった。16世紀の出土品はきわめて少ないため、現状ではポルトガル人が砦を建設した前後頃、旧住民は殺され家や農園は破壊され、僅かに生き延びた人々は山に逃げたと想像でき、町の歴史的变化が大きかったと想像できる。馬や農産品も失われ、人と町と貿易が消失したと推定できる。そのため、16～17世紀の出土品が極端に少ないのであろう。その後再び現地人や他地域からの移住者によってコールファッカン町がこの地に再建され、エム・ゴバーナが再び町の中心地になったと推定できる。港町を支えた貿易品を示す資料としての陶磁器が出土し、この地域の歴史の変遷と貿易状況が具体的な出土品によって復元できる遺跡である。

コールファッカンの歴史を研究しているコールファッカン在住のMuhammad Khamisによれば、現在発掘中の地は20世紀に入るまで廃墟であったという。その事実は1935年ころ撮影の航空写真からもわかる。オマーンとの地域的な戦いが1808年にあり、殺戮された遺体が散らばり血が染みこんだ地には人が住まなかった、あるいは1521年にポルトガルが殺戮をしたときに町が破壊され廃墟になったという山裾を流れる狭い涸川を挟んだ西隣の海岸に首長シェイクの家や町が19～20世紀にあったにも関わらず、隣接する東側の砦下の廃墟地に誰も住まなかった理由がそうした殺戮にあったと推定できる。

発掘区域は砦の下方部に近く、海岸際に建てられたと推定できるモスクの南側にあたる。発掘区域は20世紀に海岸通りからモスク横を通して町内に入る

主要道路に近い居住区の一部にあたる。モスク南側壁から約40m南西南方向が発掘区域北東端となる。発掘区域と砦の間に建っていた住居群はイラン人あるいはイランから移住してきたアラブ人が空き地に新たに住み初めてからできたという地元人が何人かいる。1930年代にイラン国王の政策でイラン海岸に居住していたアラビア語を話す人々すなわち所謂アラビア人がイランからアラビア半島に移動させられたためと解釈する地元民もいる。1935年にペルシア湾岸各地に移住を始め、1940年代頃には発掘区域と砦の間のそれまで家がなかった部分に、移動してきたイラン人・アラビア人が新家を建てたと地元民は言う。レベル1の家跡床面から出土した陶磁器は20世紀であり、15世紀の陶磁器の混じりもある状態から、400年間ほどの空白期間において20世紀前半から新居住者が家を建てた場所と推定できる。発掘によって、15世紀の家配置とほぼ同じ位置に、家壁と道路が重なるように20世紀前半の家と道路が発見されたことは、この地域の町構造を考えるうえで興味深い事実である。

平屋のモスクが発掘区域東北端から40mの間隔を空けて北側の海岸側に残り、地元民はモスクの北側は海岸だったという。1980年前後の写真にはモスクの海岸側に1列の家並が見える。モスクの開き戸木枠にはヘジラ1359年と彫刻されている。西暦1937年にモスクが建てられた可能性がある。このモスクが建てられる前、同じ場所に大きなモスクがあったと言う地元民がいるため、それ以前からモスクがあったと推定できる。町東側外れにあったモスクを新居住者が建て直したと推定できる。

町跡西側部の海岸道路に沿って20世紀末建造の大きな新モスクがあり、隣接する新モスクの山側に住んでいたFatimaは1970年代の子供の頃、家の窓から足を出すと満ち潮の海水に触れたという。現在の舗装道路は海岸砂浜に建設されたことは明白である。この発掘地の西側海岸部にコールフアッカンの首長の家があったから、20世紀町の中心部は発掘区域よりも西側である。

### 発掘地の生活

エム・ゴバーナに居住した人々の生活は半世紀前にアラブ首長国連邦が成立する以前は、漁業、真珠採取、農業、牧畜、貿易などと仮定できる。発掘でその具体的な証拠は未発見であるが、想像を交えな

がら自然と地勢を基に推定してみよう。地元民 Abdullah A. Alnajjarは、以前は真珠採取と貿易が生計だったと言う。夏は真珠を採り、冬にインド方面を含めて貿易に従事した人々がいたことは疑いない。アラビア半島の一般的な港町の状況と同じであったことを確認できる。町を見下ろす山上の平坦地に残る畑は小麦栽培を示し、今も産業の一つである近海漁業もインド人雇用者が現在担当しているが、主産業の一つだったと言えるだろう。今も残る町西側に接するナツメヤシ農園では以前からナツメヤシを栽培していたに違いない。コールフアッカンは冬になると比較的雨の多い地域であり、現在も周辺地域に Diba, Masafiなどのミネラル水産地がある。デーツや野菜類の農業も日常生活を支えた産業であったと思われる。ただし、真珠採取は20世紀末にはまったく実施されていない。

14～15世紀の出土陶磁器から遠隔地貿易の状態と地域の実態を調べることがコールフアッカンの発掘の主要な目的であった。海上貿易を担った人々の生活の場が発掘した遺跡であり、その人々が日常生活で使用した陶磁器の破片が貿易と生活の様相を伝える。貿易と真珠採取、漁業は船を使用し、船は海岸近くの入り江または砂浜に停泊した。船の具体的な状況は復元できないが、各地で生産された陶磁器の破片は貿易を行った歴史資料として利用できる。そのため、陶磁器の種類や器種の分類は基本的な整理項目となる。陶磁器の産地分類や年代推定も貿易の実態を知る重要な項目である。貿易を語る時、数量や重量も重要な調査項目となる。

産業は時代的に変化するが、基本的な生活が継続的であることも一般的なことである。具体的な出土品の様相と性格から、歴史的な変化を推測することも研究目的の一つとなる。第2次発掘調査終了時点では表土層及び第1層のみの発掘であり、時代的な変遷を示す資料がなかった。第3次発掘調査では漁業と貿易を行ったと推定できる魚骨や東・東南アジアの陶磁器などが家跡とともに発掘され、ほぼ同じ時代に都市となり同じ時代に廃墟となったジュルファール遺跡及びその出土品の比較検討が新たな課題となった。第4次、第5次調査では家の配置と構造を知ることができ、第6次調査では家外の空き地の利用方法が判明した。空き地には炉やゴミ穴が集中して発見された。

6次にわたるコールフアッカンの遺跡の調査は、イ

ンド洋貿易にも従事したアラビア半島の小さな港町に住んだ人々の生活、今は記憶から消えた歴史の一端を蘇らせることとなった。

#### 文献

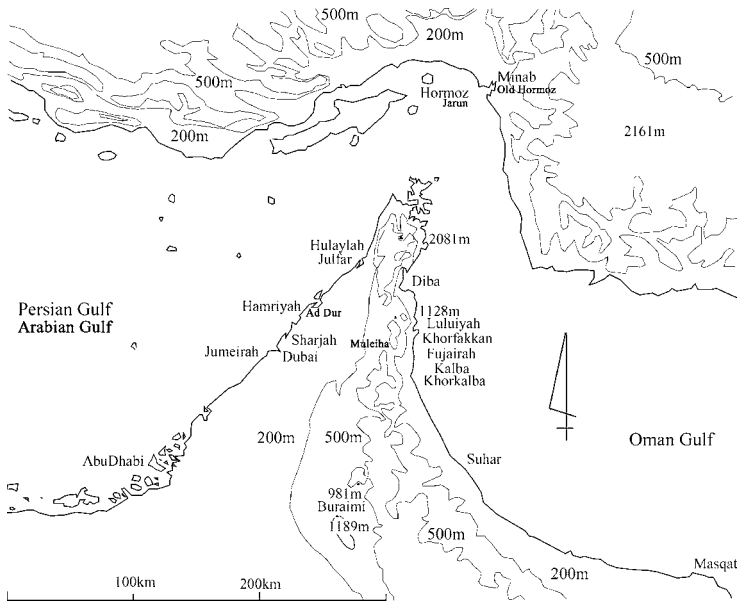
Facey, W. and Grant G., 1996, *The Emirates by the First Photographers*, Stacey International, London.

家島彦一訳注 1998, *イブン・バトゥータ*, イブン・ジュザイイ編『大旅行記』東洋文庫630.

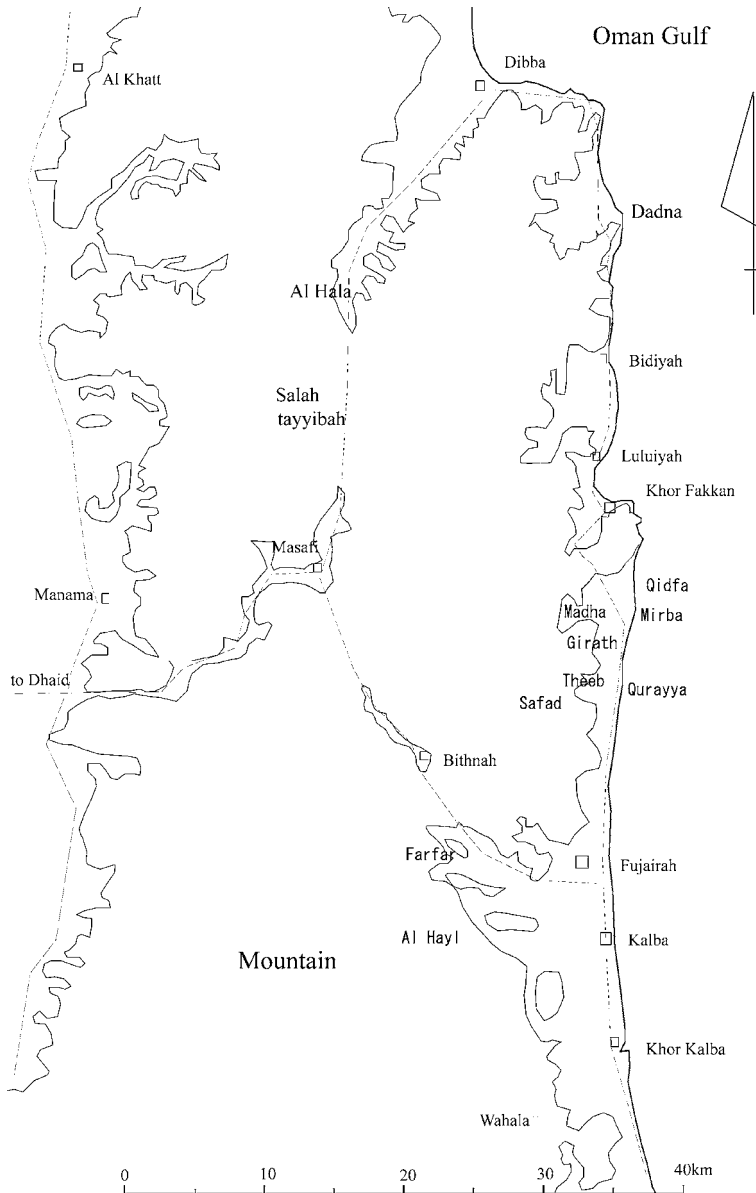
#### 補

ポルトガル砦かもしれないタワーが2005年末に見された。第4次発掘調査中にエム・ゴバーナの西北部で厚い石壁をもつ塔跡と長く延びると推定できる石壁が残ることを発見した。エム・ゴバーナの周辺部に僅かに残る20世紀の古い建物とその跡を整備し、修復復元する作業がDr.サタール指揮下で行われていた。大きな砦跡と推定できる建物跡が20世紀町跡内の建物撤去に伴って見つかり、地上にも石壁痕跡が残っていたことがわかった。周辺に散らばっていた陶磁器は多くが19～20世紀のものであるが、ポルトガルが砦を築く前の15世紀イラン緑釉陶器鉢片1点も採集した。塔部分の位置は北緯25,20,38、東経56,21,13である。海岸に沿う現在の道路から数十mの場所で、エムゴバーナからワディ河口近く

(N25,20,33、E56,21,19) を渡った農園に接している。

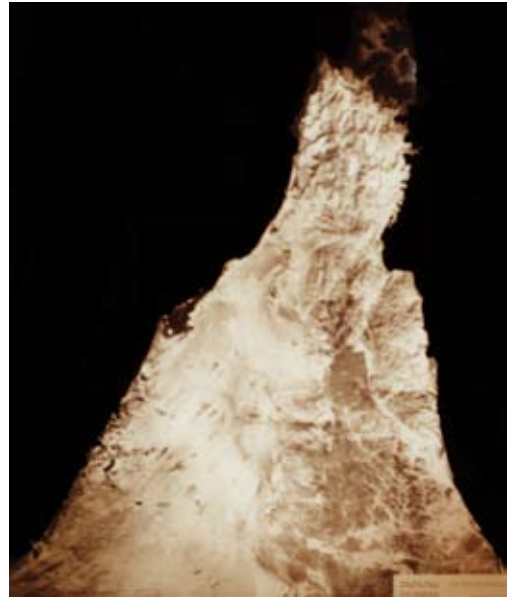


Location of Khorfakkan



Location of Khorfakkan and the Batina coast

Figure 1 Maps and photos of Khorfakkan and its surrounding areas



a. Luluyah fort and Khorfakkan fort are situated on either side of Khorfakkan bay (This photo was probably taken after 1980).



c. Air view of Khorfakkan city from east. Fort is located left side of small mountain on the bay (This photo was probably taken around 1975).



Views of Khorfakkan fort and town site over Khorfakkan bay in 2005 from north.



Figure 5 Khorfakkan Fort and town site. This photo was taken in 1935 (Facey, W. and Grant G., 1996, The Emirates by the First Photographers, Stacey International, London, p.104.).

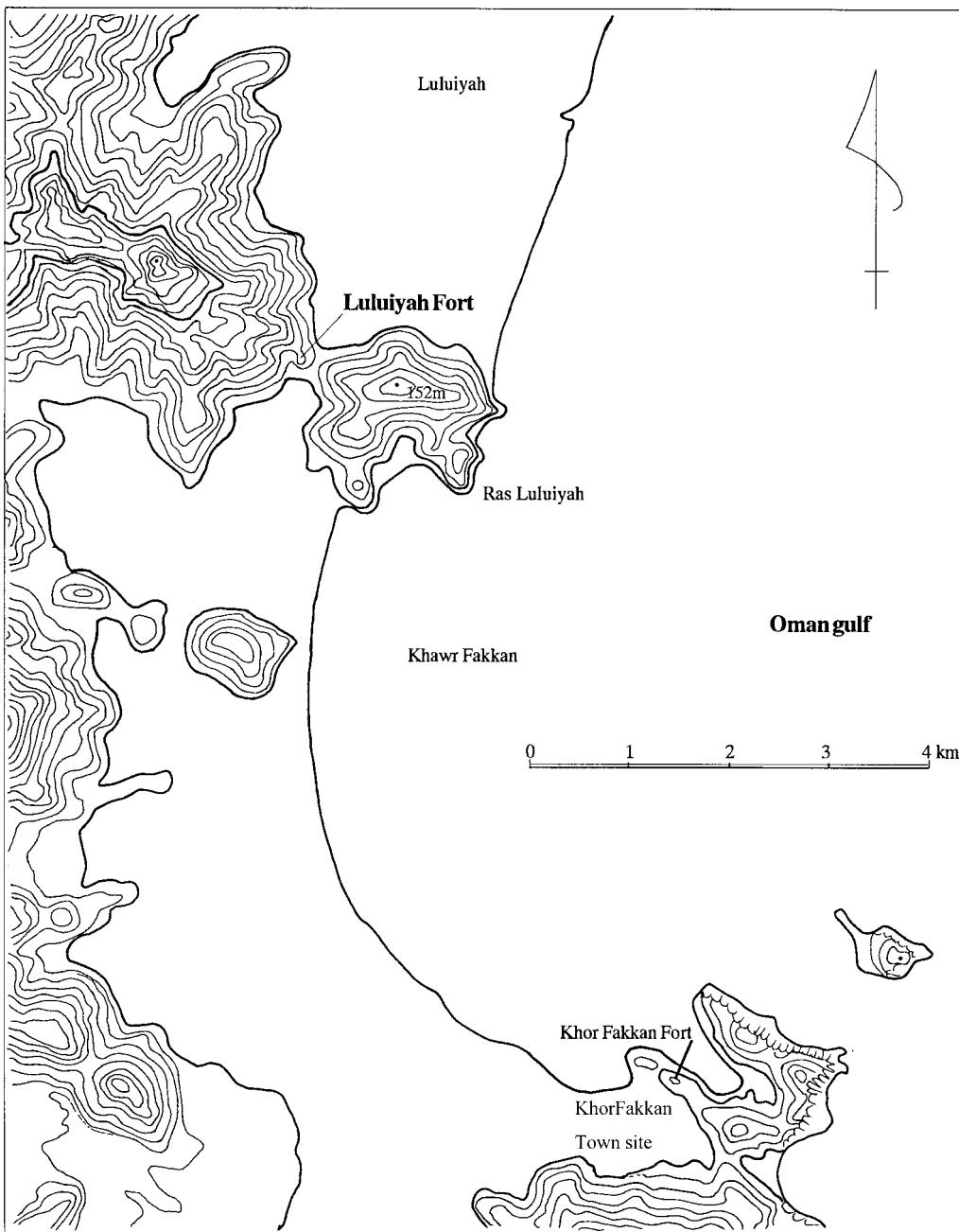


Figure 2 Map of Khorfakkan showing Khorfakkan fort, Town site and Luluyah fort.



Views of Khorfakkan fort in 2002 from south.



Views of old city site(left) and Khwar Fakkan bay(right) from the central tower of Khorfakkan fort. 2002.



Khorfakkan fort, looking from south-east and north-east. December 2001.



Looking from south-east. December 1994, before the excavations and cutting of mountain slope.



Khorfakkan fort, looking from south-west or old town site. Dec.2001.

Figure 3 Khorfakkan Fort and town site.

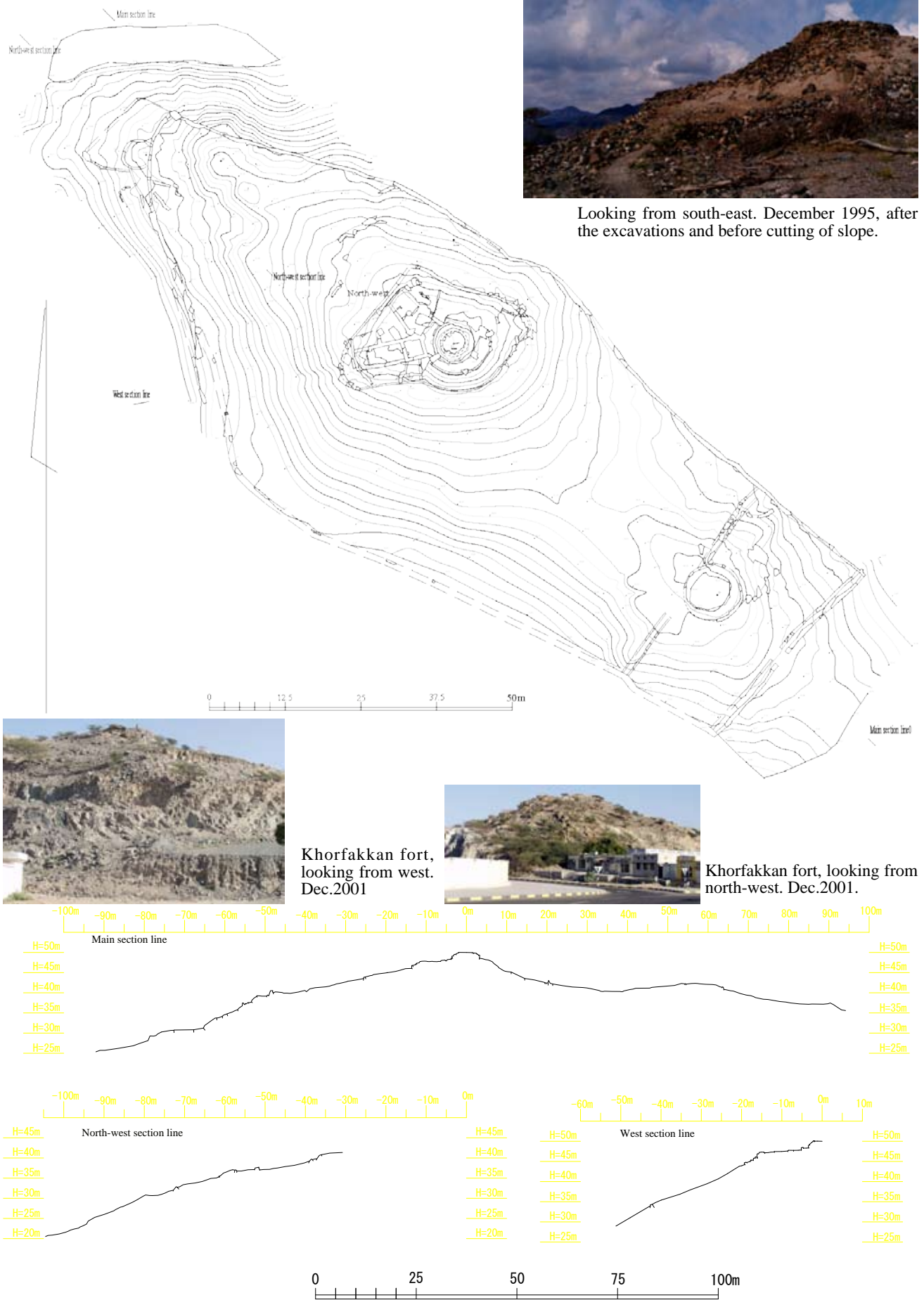
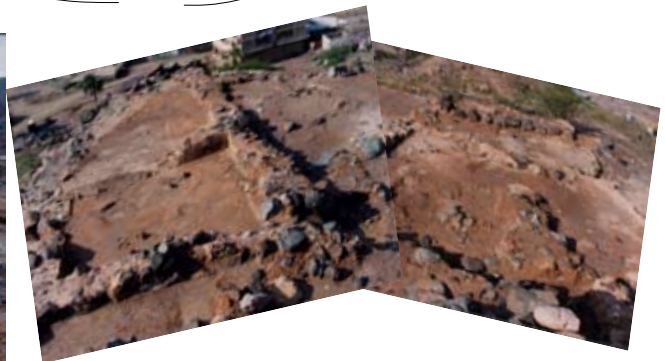


Figure 4 Plan and section of Khorfakkan Fort.



Rooms located beside the northern parts of central tower, Khorfakkan fort, looking from west. Dec.1995



Room from north. Jan.2002

Rooms located beside the northern parts of main tower, Khorfakkan fort, looking from the tower. Dec.2001

Figure 5 Plan of central tower and rooms, Khorfakkan Fort.





Figure 6 Room walls and under drain, Khorfakkan fort.



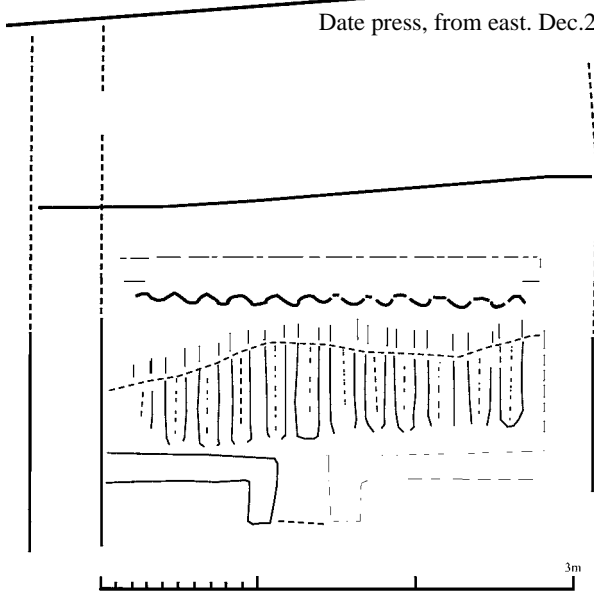
Iron cannonball, diameter 8.4cm, collected outside of enclosure wall, Khorfakkan fort.



Date press, from east. Dec.2001



Date press or Madbassa, from south. Dec.1995



Date press or Madbassa, from south. Dec.2001

Figure 7 Military establishment and Date press, Khorfakkan fort.



Stone wall, foundation of central tower and rooms, from north-east.



Central tower of Khor Fakkan Fort, from north-west or beside rooms.



Floor of central tower, Khorfakkan fort, looking from west.



Base of south-east tower and central tower beyond south-east tower, Khorfakkan fort, looking from north-east.

Base of north-west tower at the corner of northwest stone wall, Khorfakkan fort, looking from north-west.



North-west tower and stone wall of west side of Khorfakkan fort, looking from north-west.

Figure 8 Towers and stone walled foundations, Khorfakkan fort.





Looking from south-east. December 2001, after the excavations and cutting of slope.



Enclosure stone wall, east side of Khor Fakkan Fort.



Enclosure on the slope of mountain between watch tower and Khorfakkan fort. Wheat had been cultivated in winter.

Figure 10 Khorfakkan fort and farm on the top of mountain..



Grave yard and stone constructed tombs on the gentle slope, which inclined to south, between 59m and 64m peaks, south side of Khorfakkan fort



Watch tower on the top of 99m mountain locate south of Khorfakkan fort. Rectangular plan of 4x3.5m, wall thickness 0.7m.



Watch tower locates west direction of Khorfakkan fort. Enclosure on the slope of mountain between watch tower and Khorfakkan fort. Wheat had been cultivated in winter.

Figure 11 Grave yard and watch towers on the mountain, near Khorfakkan fort.



Khorfakkan old town site and fort from south-east. Dec.2001.



Khorfakkan old town site and fort from south-west. Dec.2001.

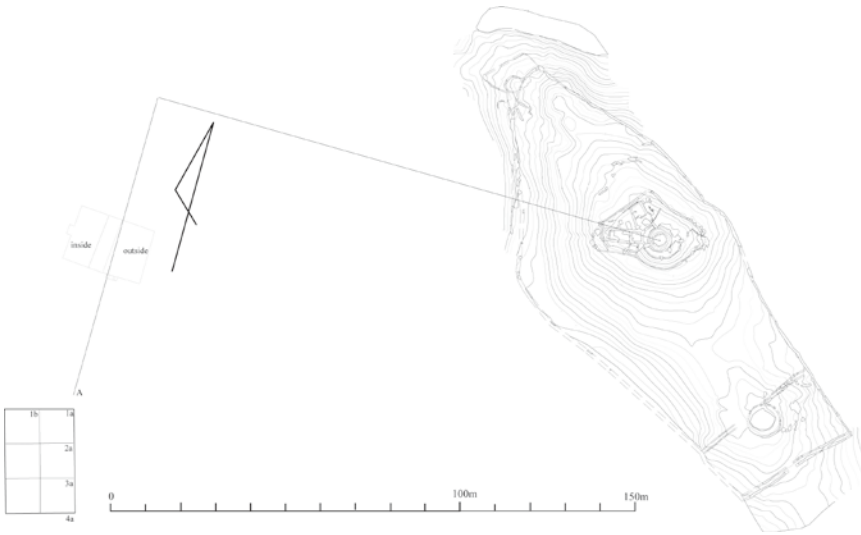


Views of Khorfakkan old town site from east or fort. Western parts of old town still remained but eastern parts of buildings already removed. Dec.1994.



Khorfakkan old town site from west. Foundations of recently removed houses are seen. Dec.1994.

Figure 12 Khorfakkan town site and its environment.



Khorfakkan old town site, looking from rooms beside the northern parts of central tower. Jan.2002



Air view of Khorfakkan bay.



Ships at Khorfakkan bay.



Figure 13 Excavated area of Khor Fakkan town site and surroundings. December 2007.





Figure 2 Excavated area of Khor Fakkan town site and surroundings.



After trench research, we took recently deposited surface soil by machine at Khorfakkan old town site. Dec.2003.



Excavation of December 2004, Khorfakkan town site.

Figure 14 Trench excavation and Removal of upper new deposit layers.



Trench of Khorfakkan old town site. Dec.2001.



Section of trench, grid 1a, surface and level 1



House wall of grid 1a, level 1.



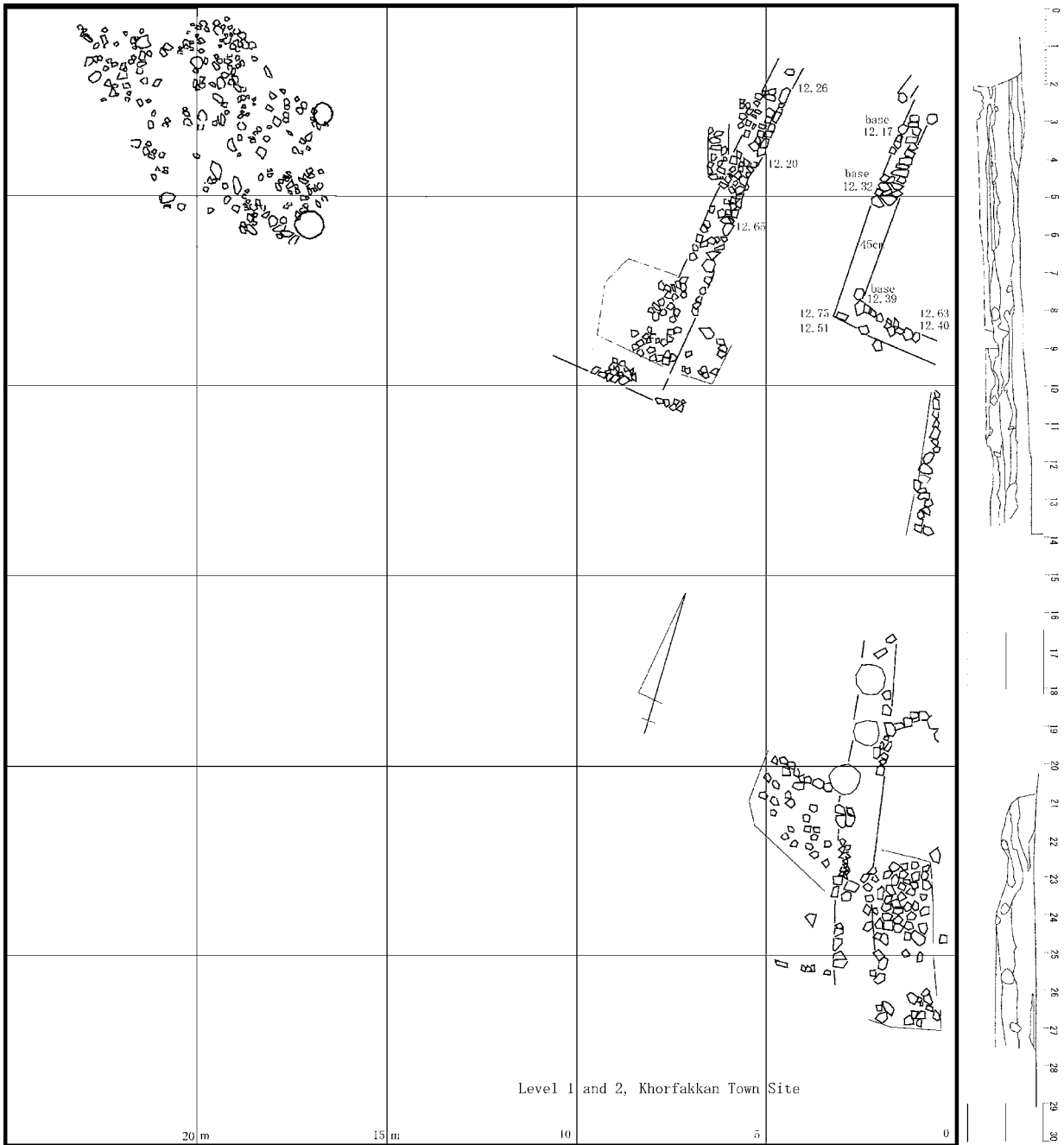
Blackened hearth and grinding stone found outside of House wall, grid 1a, level 1.



Figure 15 First season's soundings at the Khorfakkan old town site. North-south direction 40m trench was set in Dec.2001. Section was drawn on the east side of trench wall. Blue point or standing scale shows the point from 10m south from point A(A is 150m west and 90m south from central tower of Khorfakkan fort). Level 1 is remaining stone walls and floors, house of the early half of 20th century. Level 2 is rubbish just under the house foundation of level 1. Level 2 belong to the first half of 20th century or earlier.



Houses and street, Level 2 of Khorfakkan town site





East house of Level 1 and stones of Level 2.



East house of Level 1 and stones of Level 2.



Ruined house at Khorfakkan.



Figure 17 Level 2 of Khorfakkan town site



Excavation of Levels 1 and 2.



Outside of Stones of Level 2 and excavating gray layer Level 2.



Houses and Street, Levels 1 and 2.



Tannur or oven for baking bread made by drum can, level 1 or dug from upper layer.

Figure 18 Levels 1 and 2 of Khorfakkan town site

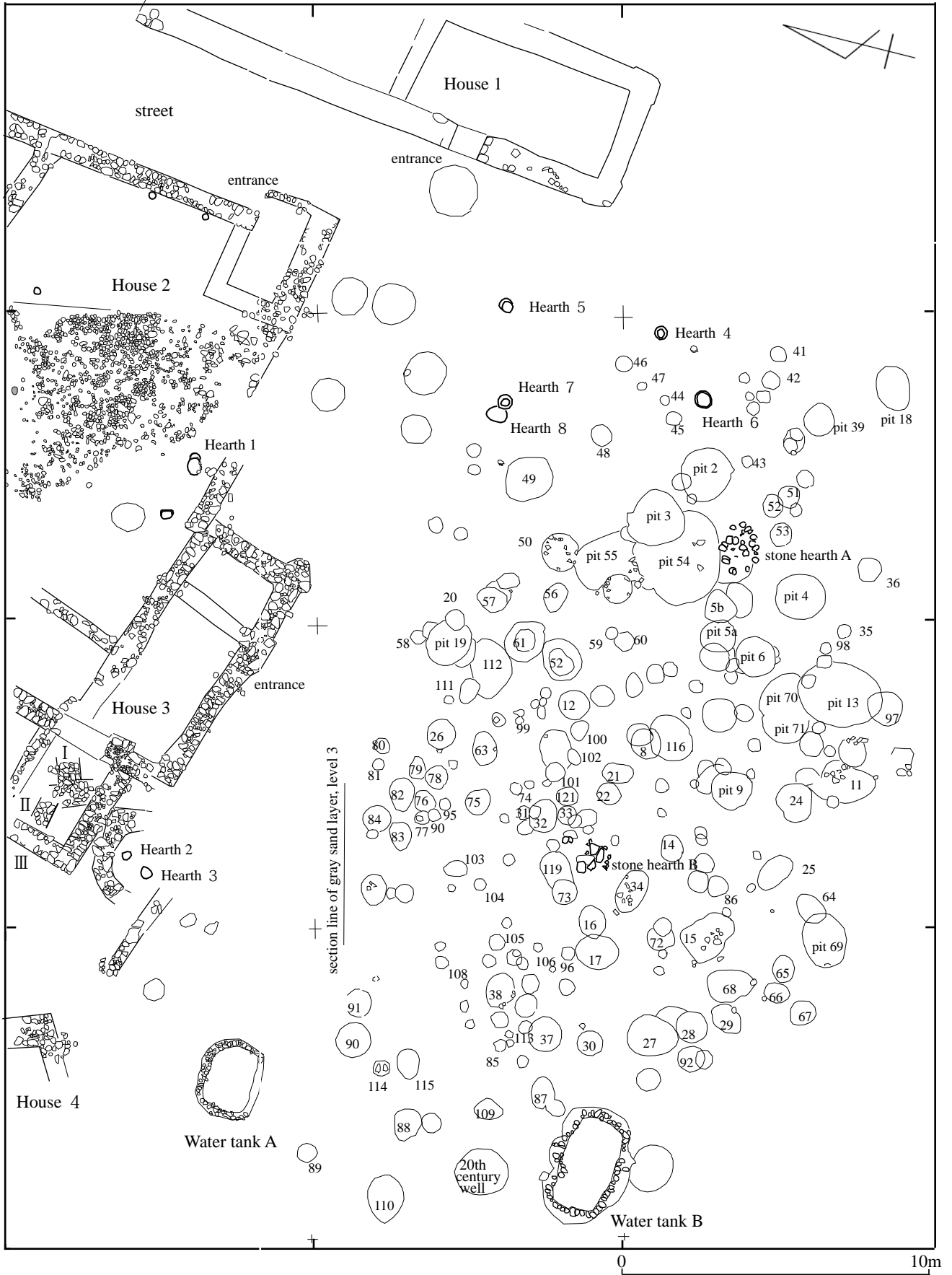


Figure 19 Plan of level 3, Khor Fakkan town site

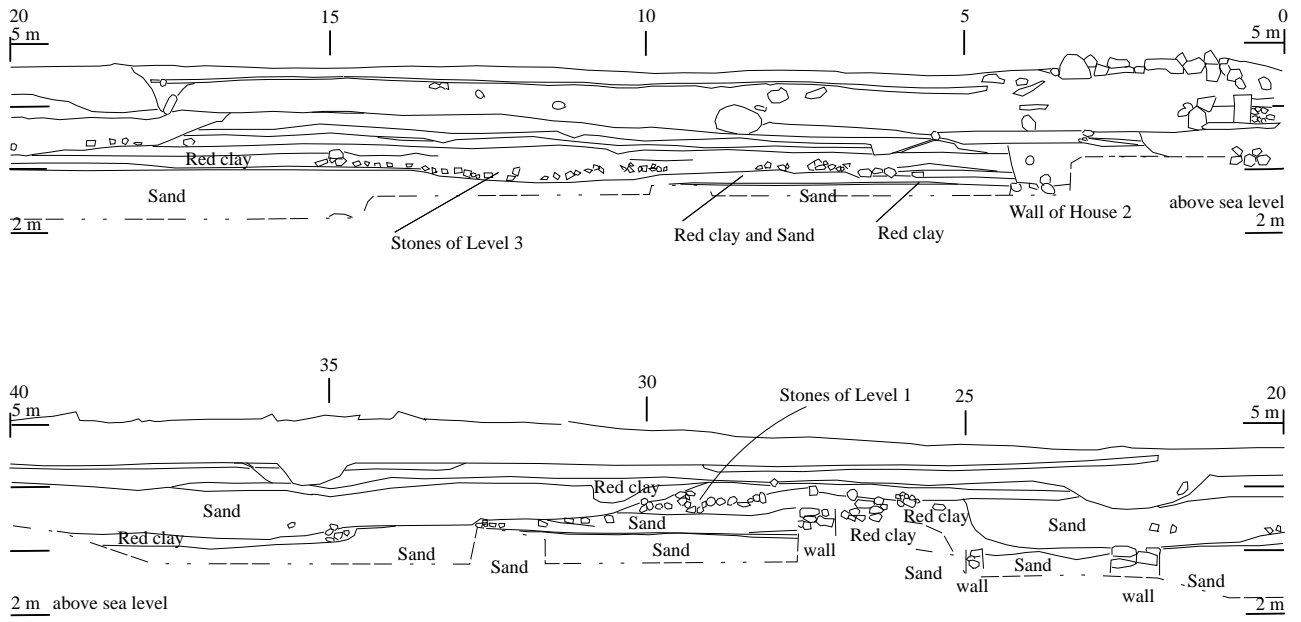
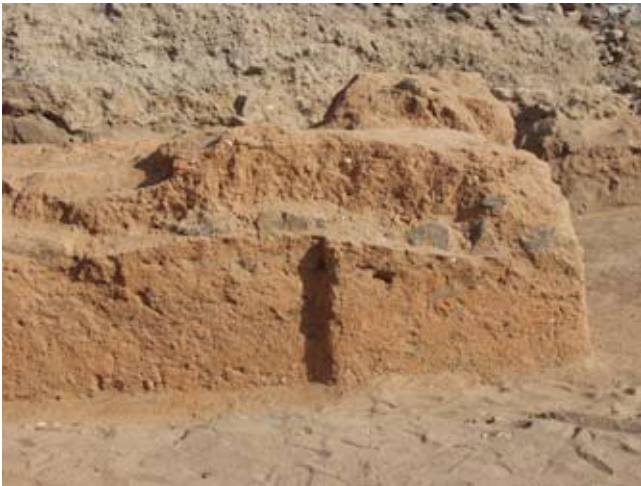


Figure 20 Section of north wall of excavated area.



House 1 (East house of Level 3). Wall, three layers stones and red earth were plastered by red earth with white lime inclusion.



Figure 21 House 1. Level 3 of Khorfakkan town site.





House 1, Street and House 2, in Level 3.



House 2 of Level 3, Khorfakkan town site



Deposit of street between Houses 1 and 2. Gray layer is Level 2, Khorfakkan town site



Excavations of House 1, Khorfakkan town site



Fish bones in Level 3, outside House 3



Figure 22 Houses 1 and 2 of Level 3, Stones of Level 2, Khorfakkan town site



Figure 23 House 1, Level 3, Khorfakkan town site



Figure 24 House 1. Entrance faced west side.



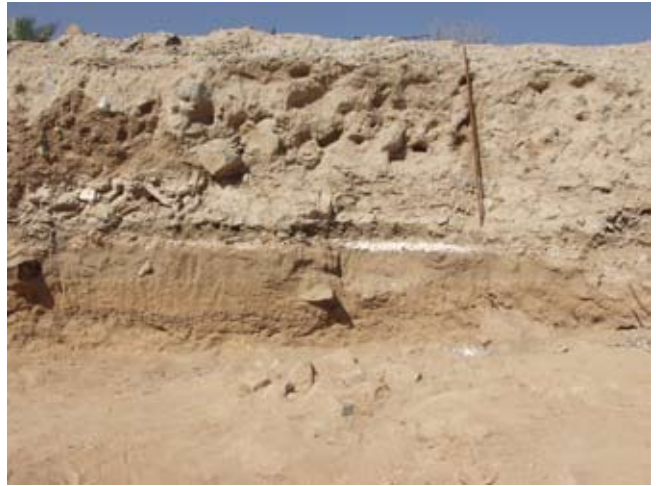
Figure 25 Houses 1, 2 3 and pits.



Figure 26 Houses 1 and 2, and Street, in Level 3.



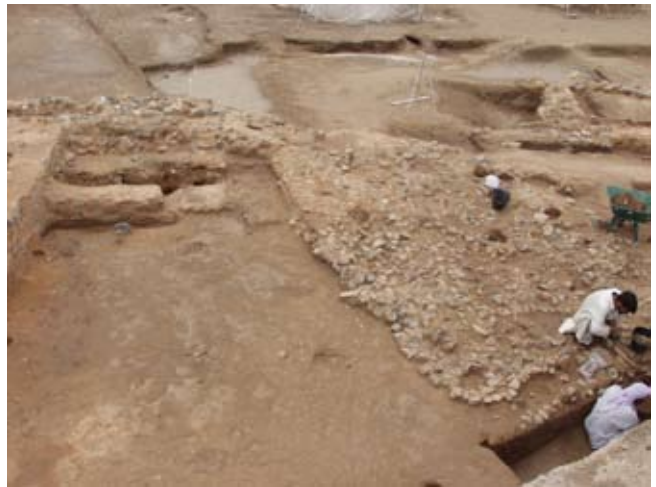
House 1, street and House 2, in level 3.



Section of excavated area on the stone foundations, Level 3



Room of House 2, level 3.



Floor of House 2, level 3, with post holes. Diameter of post holes are 16-20cm.

Camel teeth, Myanmar green ware dish found on the floor of House 2, level 3.



Figure 27 House 2, in Level 3.



Excavation of House 2 and Stone foundation of house 2, in Level 3. One layer of stones was laid out on outer floor of House 2, level 3.

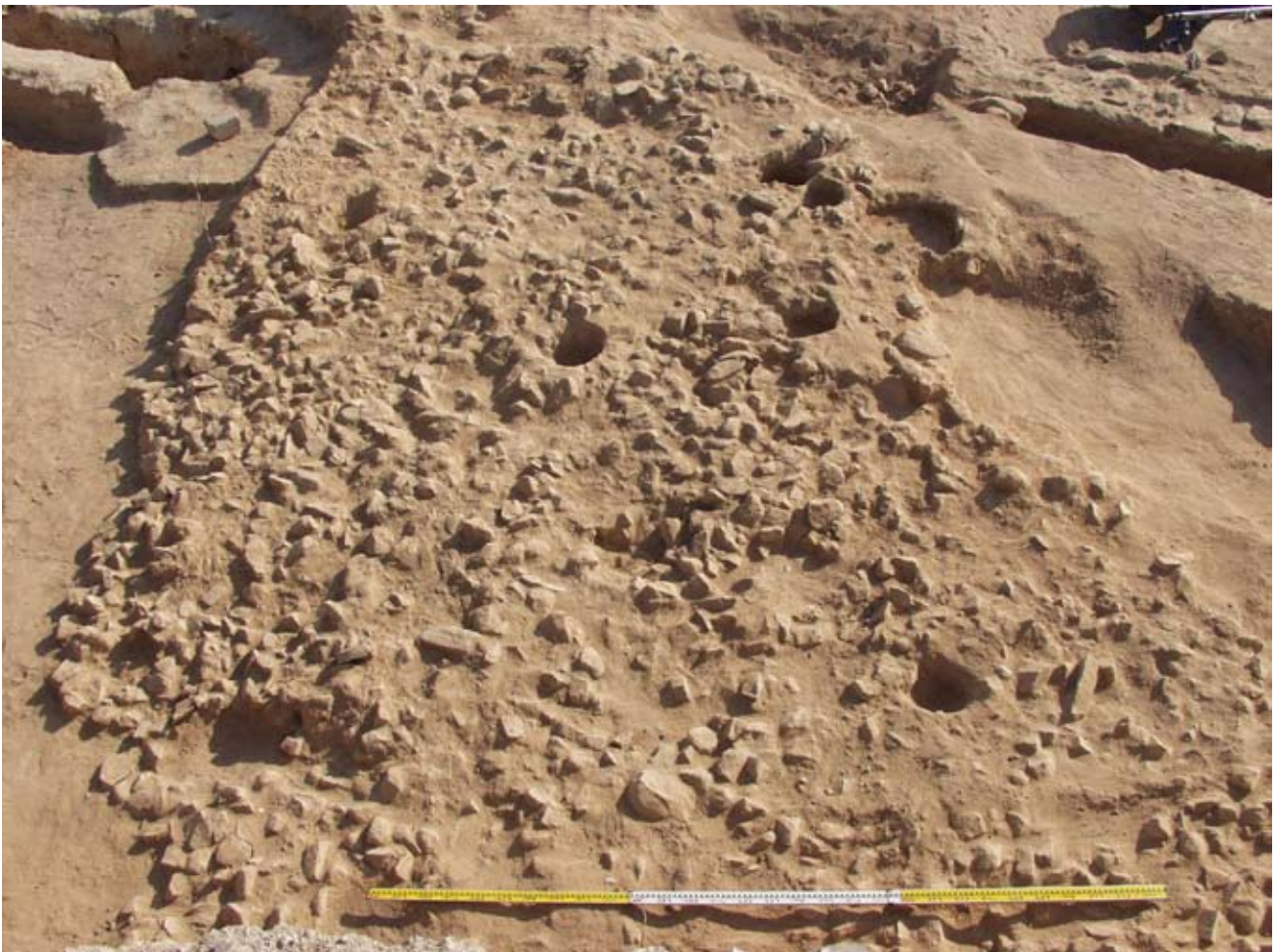


Figure 28 One layer of stone foundation laid out on outer floor of House 2, level 3.



House 2. Small room was added to the House 2. A narrow entrance locates at the north-east corner facing to the street.

Figure 29 Small additional room of House 2, level 3.





Chinese blue-and-white dish and bowl, found in the deposit of small room in House 2. 嘉靖 1522-1566.

Figure 30 Chinese blue-and-white from a small additional room, House 2, level 3.



Ceramics found in the deposit of small room in House 2. Earthenware photo is sample.  
Figure 31 Glazed Islamic ware and Earthenware from a small additional room, House 2, level 3.



Shell and fish bones, found at the deposit of small room in House 2.



0.9g

1.6g

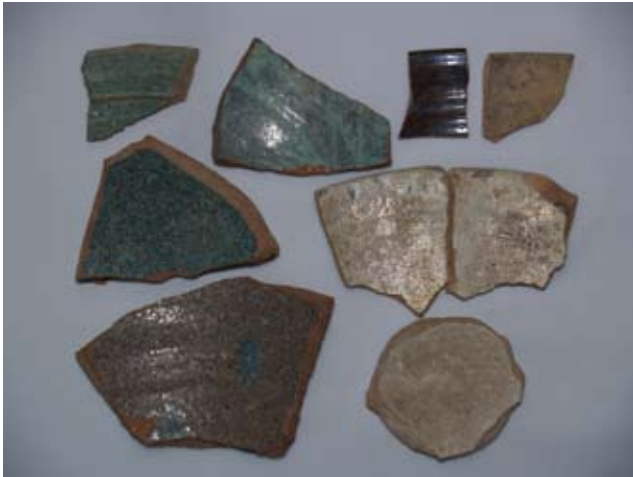
Glass bangles and vessels. Stone rods. Small room of House 2.

Finds from the deposit of small room in House 2. Chinese blue-and-white, dish and bowls, 336g. Chinese brown ware, jar, 35g. Green glazed ware, bowls, 110g. White glazed ware, bowls, stonepaste, 22g. White glazed ware, bowls (170g) and vase (18g), pink fabric. White glazed ware painted cobalt blue, bowls, 18g. Brown glazed ware, bowls (20g) and vase (13g), Earthenware, red fabric, 4,890g. Earthenware, pink/yellow fabric, 3,100g. Oyster ??g and other shell 950g. Glass bangles 1.3g. Glass vessels 8.3g.

Figure 32 Shell, glass and stone objects from a small additional room, House 2, level 3.



Grinding stone, 355g.



Green glazed ware, bowls with pink/yellow fabric, and vase with pink fabric, 15th century. Green glazed ware painted green, bowl, pink fabric. Brown glazed ware, bowl, 15th century. Opaque white glazed ware, bowls, pink/yellow fabric, 15th century. Brown glazed ware, bowls, pink fabric.



Myanmar green ware, dishes, 15th century. Chinese blue-and-white, bowls, 15th century. Glass bangle and vessel.



Green glazed ware, bowls, pink fabric. Brown glazed ware, bowls, White glazed ware, bowl, yellow fabric. White glazed ware painted cobalt blue, bowl, pink fabric. White glazed ware, bowls, stonepaste. White glazed ware, bowls. Chinese green ware, bowl, gray fabric, 14th to 15th century.

Figure 33 Finds from stone floor of House 2, Level 3.



Figure 34 Hoose 3, Level 3.



House 3. Additional small room was built East side.



Figure 35 Hoose 3, Level 3.

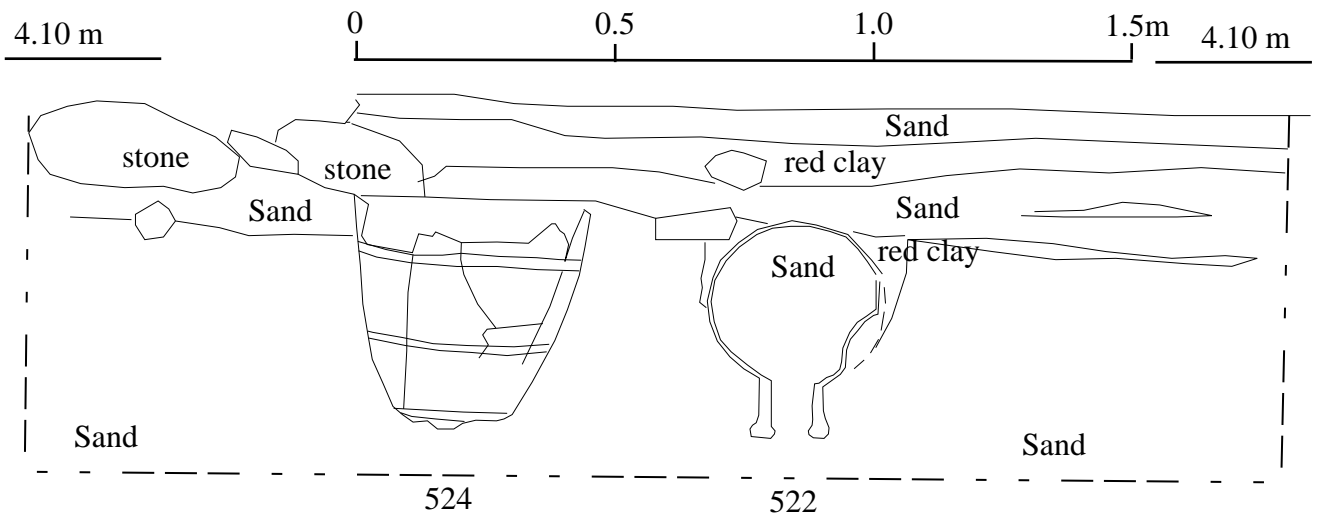


Figure 36 Hearths under the wall of additional room of Hoouse 3, Level 3.



Figure 37 Hearths or tannur under the wall of additional room of House 3, Level 3.

Finds from House 3.

Finds from Inside of House 3, December 2006. Chinese green ware, dishes and bowls, 293g, 15th century. Chinese blue-and-white, dish, 16g, 15th century. Chinese brown ware, jars, 12g. Myanmar green ware, dish, gray fabric, 58g. Green glazed ware, bowl, yellow and pink fabric, 34g. White glazed ware, bowl, pale pink and pink fabric, 97g. Earthenware, red fabric, 210g. Earthenware, pink/yellow fabric, 150g. Glass bangles, 4.1g. Glass rod, 1.1g. Oyster 20g. Other shell 20g.

Finds from north outside of House 3 or north room, December 2006. Chinese blue-and-white, bowl, 1.8g. Green glazed ware, bowls, 55g. White glazed ware, bowl, 129g. Green glazed ware, bowls, Stonepaste, 38g. Brown glazed ware, bowls (195g) and vase (35g), pink fabric. Other glazed ware, bowls, 17g. Earthenware, red fabric, 15,970g. Earthenware, pink/yellow fabric, 1,610g. Glass bangles, 29.3g. Glass vessels, 7.4g. Oyster 7,620g. Other shell 710g. Fish bones, イカ貝殻, animal bones, 90g.

Finds from west outside of House 3 or Kitchen, December 2006. Chinese green ware, bowls, gray fabric, 37g. Green glazed ware, bowls, pink fabric, 259g. White glazed ware, bowl, stonepaste, 124g. White glazed ware, bowl, pink fabric, 17g. White glazed ware painted cobalt blue, bowl, 25g. Brown glazed ware, bowls, pink fabric, 59g. Earthenware, red fabric, 680g. Earthenware, pink fabric, 420g. Oyster 10g. Other shell 340g. イカ貝殻 30g.





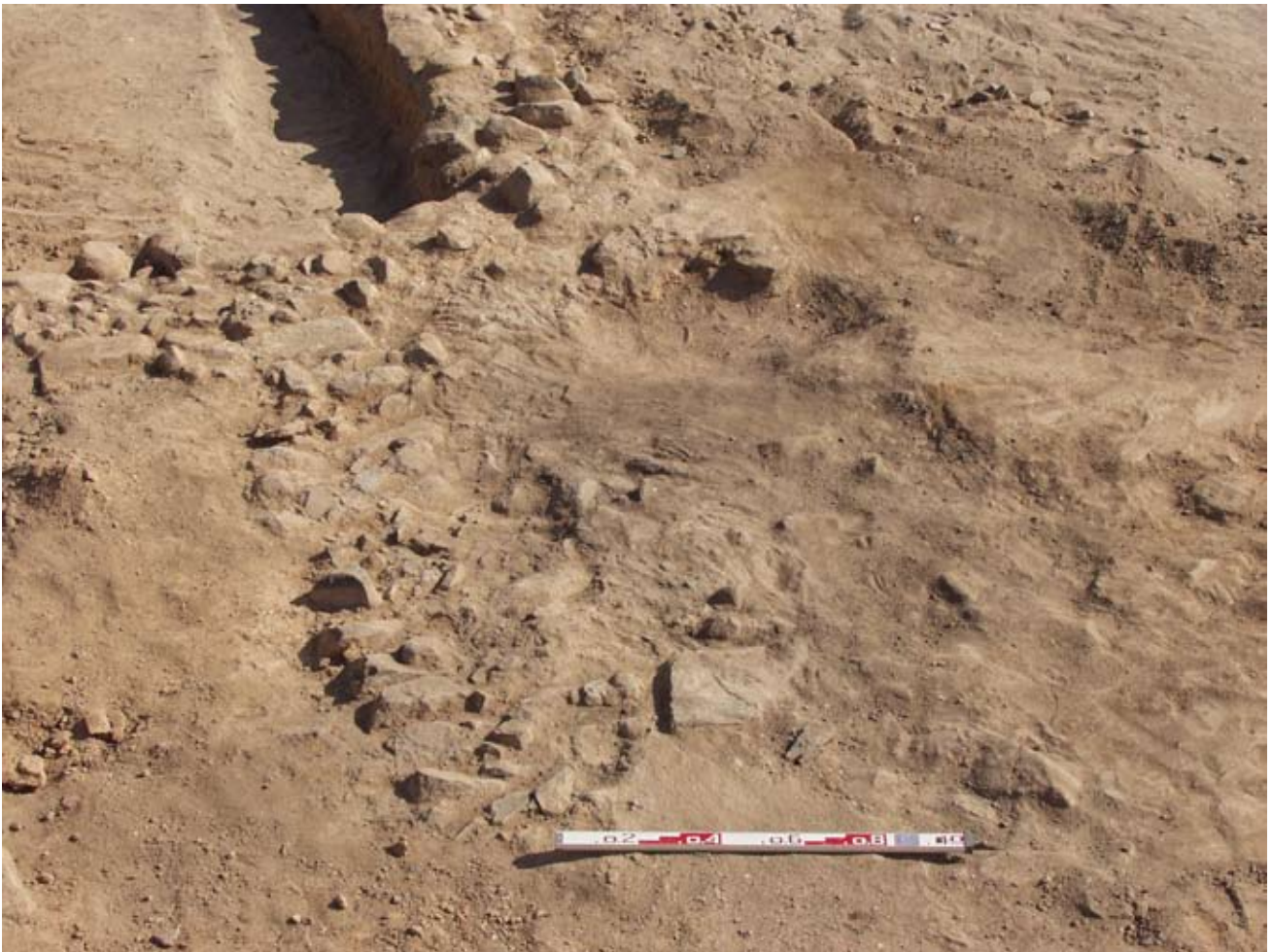
Figure 38 Finds from inside of floor, House 3, Level 3.



Figure 39 Finds from north outside of House 3 or north room.



Excavations of House 3 and Hearths outside House 3, in Level 3.



Hearths under the wall of House 3, gray sand layer of level 3.

Figure 40 Hearths of House 3.



Figure 41 House 3 and other former houses. Three layers of walls was found in a north-west room. Kichten area fenced by stone wall was found at the west side of House 3 near the water tank.



Figure 42 Kichten area of western part of House 3.



Hearth 3



Animal figure found at the Kichten area of House 3. Fenced stone wall is built on sand layer and this animal figure was found in sand layer just under the stone wall. 10.3g.

Hearth 2



Figure 43 Hearths and finds from Kichten area of western part of House 3.



Figure 44 Water tank A was found at the south-west part of House 3, in level 3. Plan is roughly rectangular and 210 x 130(165) cm. Remained wall was 95 cm height and piled up 9 layers of stones with red mud. The floor is flat and coated by white plaster. The deposit inside water tank is red mud including many falling down wall stones. The depth of water tank might be between 1 m and 1.5 m.



Water tank A seen from air in rain.

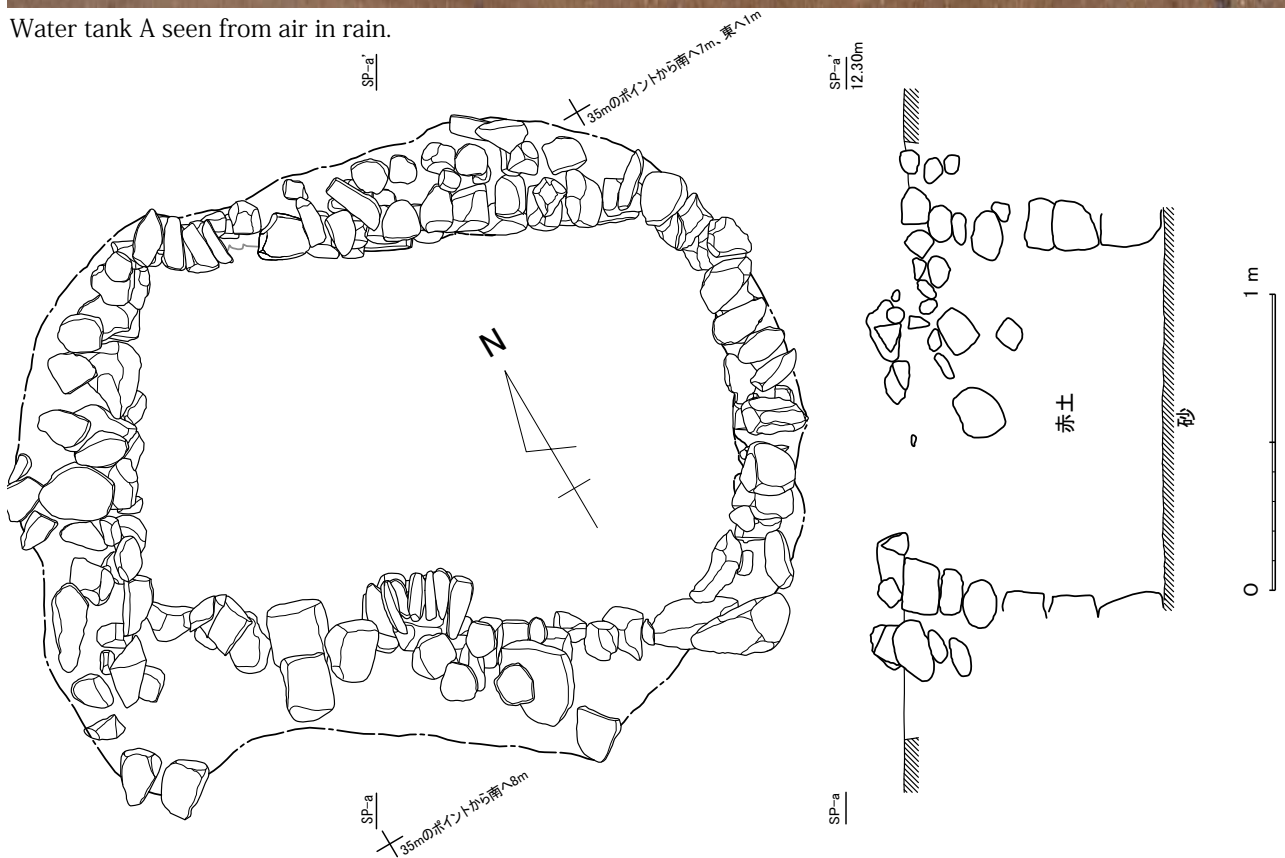
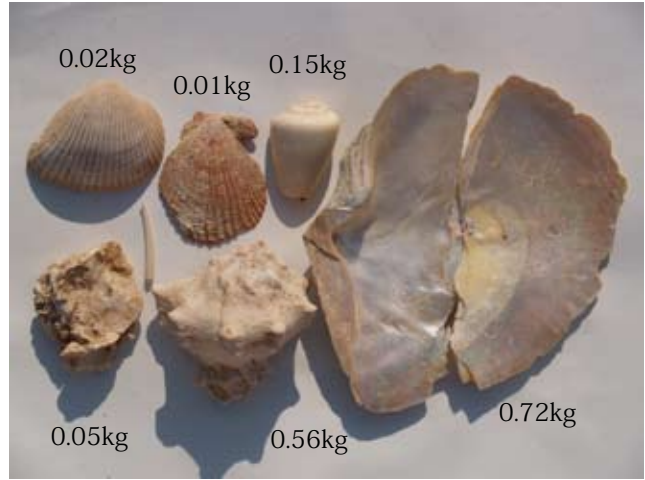


Figure 45 Water tank A, Level 3.





Samples of ceramics from the deposit of water tank.



Samples of shellfish from the deposit of water tank. Total weight of shell is 1.51kg.



Myanmar white opaque glazed ware, dish, from the deposit of water tank.

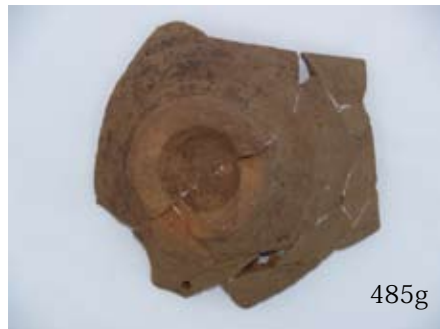


Figure 46 Finds from Water tank A, Level 3.



Water tank was found in December 2005 and completed the excavation in December 2006. Finds from the remained half amount of deposit was red mud, many falling down wall stones and artificial materials. Deposit have no layer and it seems to be dumped at one time, The artificial finds are all broken sherds except grinding stones, showing they were dumping into abrogated water tank after removing from dumped places. Finds are collected near the water tank because red mud and stones are from broken wall of water tank.

Earthenware with red fabric are large jars, cooking pots and others; weight is 2.0kg. Painted earthenware with red fabric are bowls; weight is 0.03kg. Earthenware with pink/pale pink fabric are vases from Iran; weight is 0.5kg. Earthenware with soft yellow fabric is vase; weight is 0.005kg. Red polished earthenware with pink fabric is bowl; weight is 0.003kg. Brown glazed ware with pink/yellow fabric are bowls; weight is 0.013kg. Green glazed ware with red fabric are bowls; weight is 0.514kg. Manganese black glazed ware with pink/yellow fabric is bowl; weight is 0.503kg. Myanmar opaque white glazed ware with pale pink/yellow/gray fabric is dish; weight is 0.666kg. Chinese brown ware with brown fabric is small jar; weight is 0.006kg. Chinese green ware with gray/pink fabric are dishes; weight is 0.016kg.

Lower grinding stone is flat lime stone; weight is 695kg. Upper grinding stones are small and round, weights are 0.36kg, 0.17kg and 0.13kg respectively. Weight of shell is 1.51kg.

In these finds, Myanmar white opaque glazed dish is particular ware. The date of this ware are said to be the late 16th century. The date of abandonment of water tank could be the destroy of the town which had been flourished in the 14th and 15th century. The attack of Portugee was 15??.

Green glazed ware bowls have very short mouth width and color of glaze is slightly defferent from Julfar finds. Pale green glaze is crinkled and it probably shows the date after the middle of 15th century.

The deposited finds are belonged to the 14th and 15th century and glazed wares are later than the finds from Japanese Julfar excavation which dates starts the middle of 14th century and ends middle of the 15th century. The date of Myanmar opaque white glazed dish is usually have a small circul in the center and sevrsl lines outside foot ring. There are no such paticlular technical points on this sherd. This might mean the date of this sherd is earlir than the late16th century.

Figure 47 Finds from Water tank A, Level 3.



Figure 48 Water tank B, at the open space in level 3, Khor Fakkan town site.

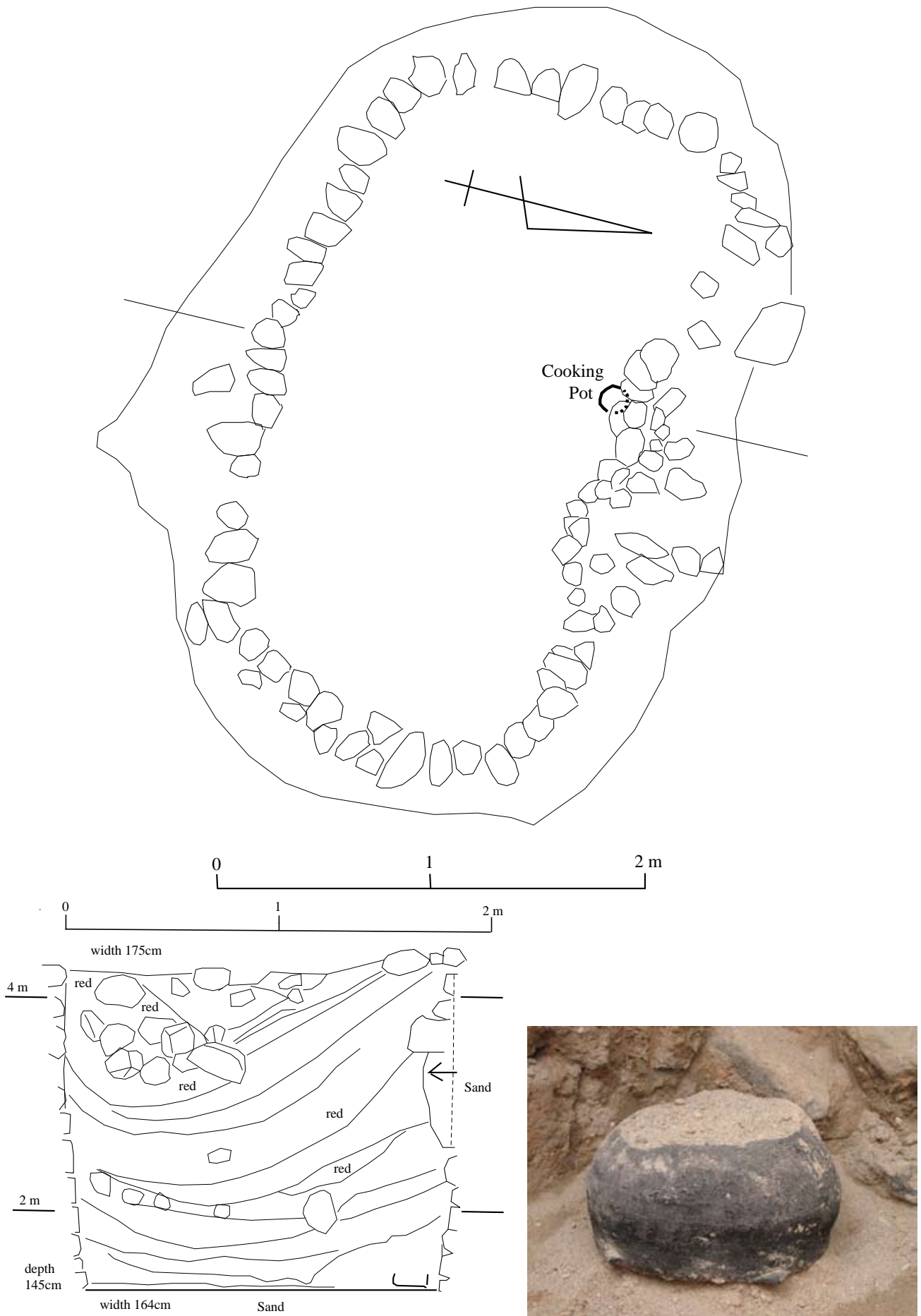


Figure 49 Water tank B, at the open space in level 3 and finds from their deposit, Khor Fakkan town site.



Figure 50 Water tank B, finds from water tank B,



Figure 51 Well, 20th century, Khor Fakkan town site. This well was found between two water tanks A and B. Members of Excavation at KhorFakkan town site, December 2007.



Figure 52 Excavation of open space in Level 3, Khor Fakkan town site. December 2006.



Pits of level 3 in open space, Level 3. December 2006.



Figure 53 Pits of level 3 in sand layer, Level 3. December 2007.



Figure 54 Pits and ovens in the open space in level 3 at Khor Fakkan town site.



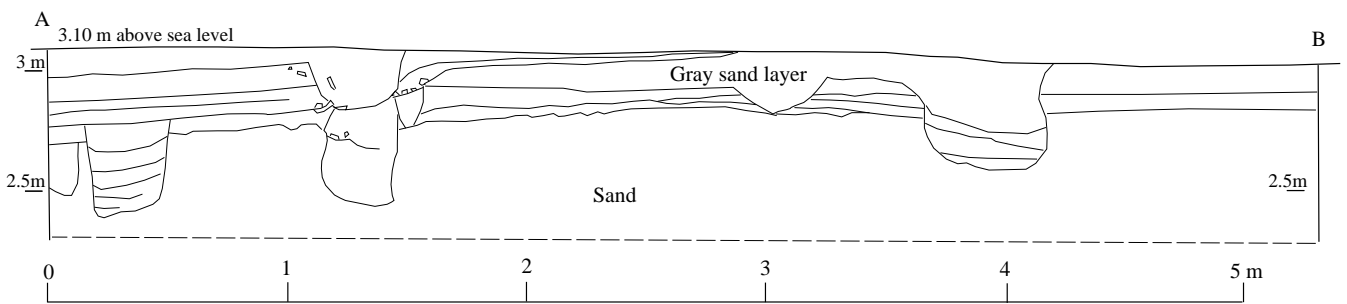


Figure 55 Layers and pits at the open space in level 3, Khor Fakkan town site.



Figure 56 Hearths and pits of Level 3 in open space, Khor Fakkan town site. Hearths are placed near the houses and lined. Many pits are found mainly outside of hearths line.



Hearth 1



Figure 57 Hearth 1 is consisted of two hearths, located between Houses 2 and 3. Interior and exterior of circular reddened mud wall are covered by several types of pottery sherds.



Hearth 4



Hearth 5



Hearth 6



Hearth 6 or Tannour 2, dug from sand surface and buried a large sized earthenware vase sherds without mouth and base. Diameter of upper part is 37cm. Remaining height of sherds is 30cm.



Hearths 7 and 8



Hearths 7 and 8 (right)

Figure 58 Hearths 4-8 in the surface of Level 3.



Hearth 9



Hearth in gray sand layer, level 3.



Stone hearth A. Stone circle was layed only one layer on thin circular rubbish dump.



Pit 1 is a thin rubbish layer spread on sand and covered by red clay. Red clay might be a hearth.



Stone hearth A was consisted of two hearths.

Figure 59 Hearths 9 and other hearsh, Stone hearth A, and Pit 1, in Level 3.



Pits 2 and 3, and stone hearth A.



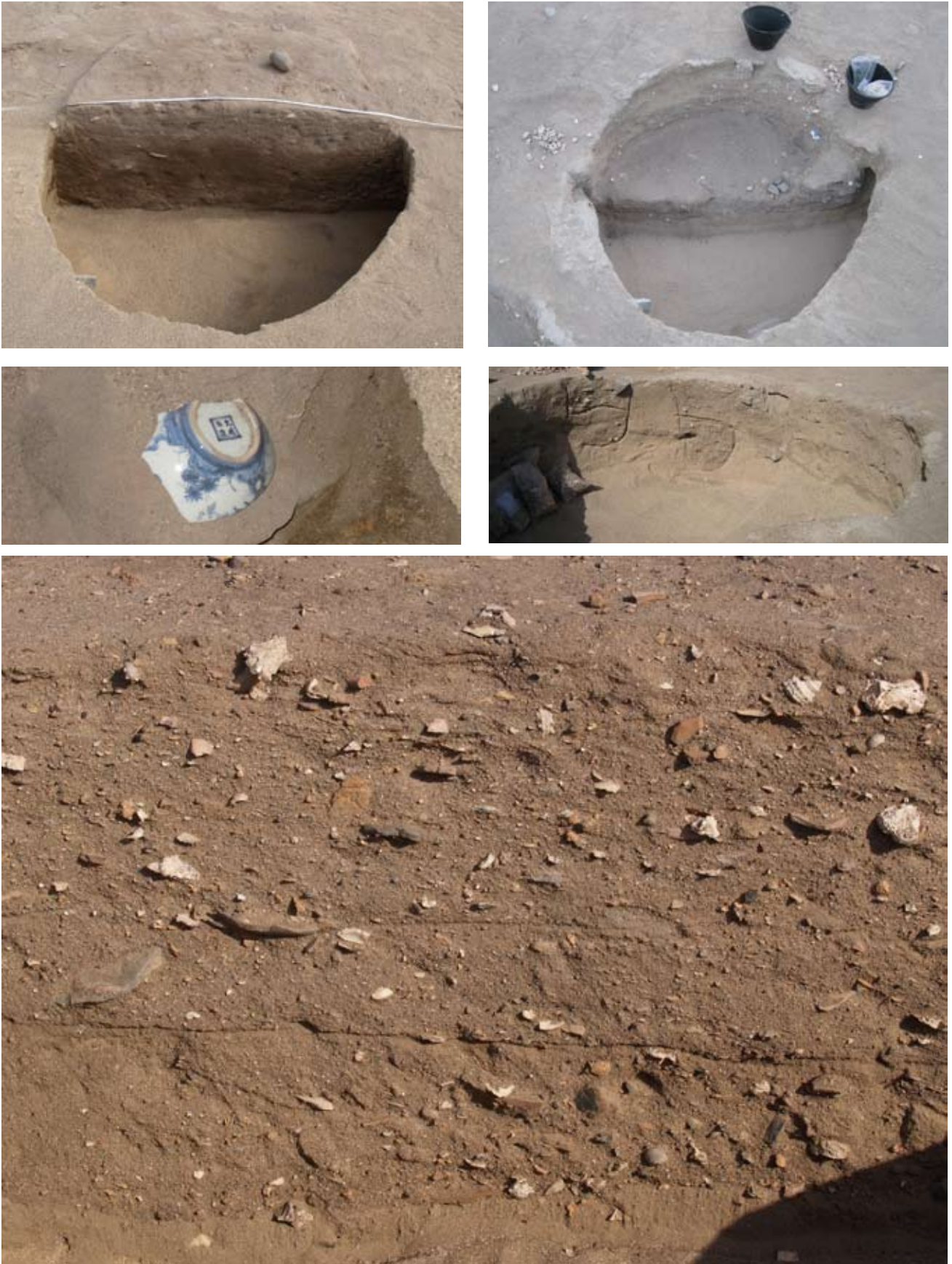
Stone hearth B, at the open space in level 3.



Plan and section of Stone hearth B



Figure 60 Stone Hearths A and B, at the open space in Level 3, KhorFakkan town site.



Pit 2, dug from surface of gray sand layer and deposited several layers inside horizontally. Fish bones and ceramic sherds are included in each deposit layer. Circular plan, diameter ? cm. Depth, ? cm. Flat sand base without plaster. There are many round pits around houses on and inside gray sand layer. These pits might be garbage dumps. Same types of garbage pits were found at Julfar, especially in sand layer of the 14th and 15th centuries.

Figure 61 Pit 2 at the open space in Level 3, KhorFakkan town site.



Earthenware, sample from Pit 2. Earthenware, red fabric, 6,600g. Earthenware, pink/gray fabric, 5,940g. イカ貝殻, animal bone, 33g.



Pit 2 and Pit 3.



Pit 3.



Pit 3.



Pit 3.



Finds from Pit 3.  
Green glazed ware, small bowl, red fabric, 217g.

Figure 62 Pits 2 and 3 at the open space in Level 3, KhorFakkan town site.



Pit 4.



Pit 4.



Finds from Pit 4.



Pit 5.



Pits 5a, 5b and 6.



Chinese green ware, bowls, 14th century. Glass bangle and rod. Pit 5.

Figure 63 Pits 4 and 5 at the open space in level 3, Khor Fakkan town site.





Pounding stones, from Kitchen of House 3 (left) and Pit 2 (right).



KFN.T621. Earthenware, Vase, pale pink/yellow fabric with large sized white inclusions. 5,166g.. Pit 5.



Earthenware, sample. from Pit 5.



Figure 64 Finds from Pit 5 at the open space in level 3, Khor Fakkan town site.



Figure 65 Finds from Pit 5.

Chinese green ware, dish, 40g, 14th to 15th century. Chinese green ware, bowls, 28g, 14th century. Chinese blue-and-white, bowl, 16g, 15th century. Green glazed ware, bowls and vases, pink and pale pink/yellow fabric, 1,125g, 15th century. White glazed ware painted cobalt blue, bowls, stonepaste, 8.6g. White glazed ware, bowls, pink/yellow fabric, 119g. White glazed ware, bowl, red fabric, 64g. Blue/green glazed ware, bowl, pink/yellow fabric, 44g. Brown glazed ware, vases and bowls, pink/gray fabric, 127g. Earthenware, red fabric, 1,420g. Earthenware, pink/yellow fabric, 6,466g. Glass bangle, 3.1g. Glass rod, 1.0g. Glass vessels, 17.5g. Fish bones 20g. Oyster 1,620g, other shell 1.780g.



Pit 6.



Pit 7 and Pit 13.



Pits 6 and 7.



Pit 7.

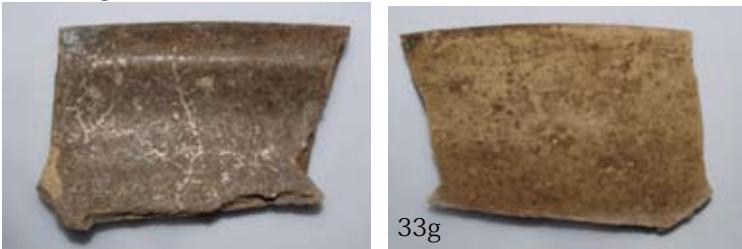


Figure 66 Pits 6, 7 and 13 at the open space in level 3, Khor Fakkan town site.

Pit 7.



Chinese green ware bowl, from Pit 7.



Date, carbonized, from Pit 7.



Finds, Pit 7.



Pit 8.



Pit 8.



Figure 67 Pits 8 and finds at the open space in level 3, Khor Fakkan town site.



Pit 9.



Pit 9.



Pit 11.



Pit 13.



Pit 13.



A pearl oyster from Pit 13.



A pearl oyster from Pit 13.



A pearl oyster from Pit 13.

Figure 68 Pits 9, 11 and 13 at the open space in level 3, Khor Fakkan town site.



Fish bones. Pit 13.



Fish bones. Pit 13.



Thai green ware dishes, interior. Pit 13.



Thai green ware dishes, exterior. Pit 13.



Pit 15.

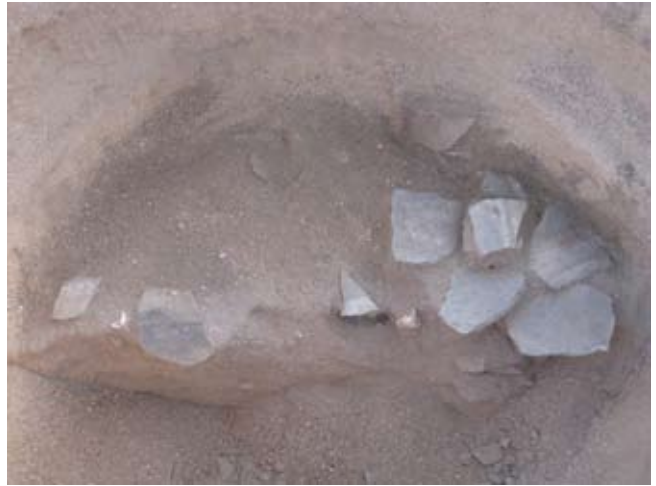


Pit 16.

Figure 69 Pits 13, 15 and 16 at the open space in level 3, Khor Fakkan town site.



Pit 16.



Pit 16.



Pit 16.



Pits 17.



Pit 18.



Earthenware and Pearl oysters from Pit 18.

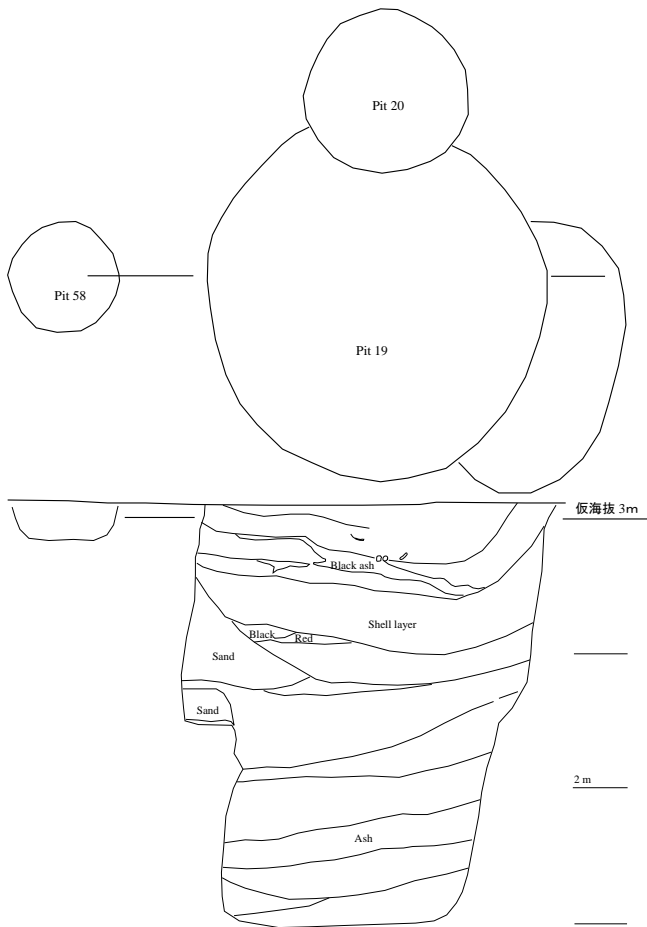
Figure 70 Pits 16, 17 and 18 at the open space in level 3, Khor Fakkan town site.



Pit 19 at the open space in level 3, Khor Fakkan town site.



Pit 19 at the open space in level 3, Khor Fakkan town site.



Plan and section of Pit 19.



Pit 19.



Pits 19.



A bronze coin from Pit 19.

Figure 71 Pit 19 at the open space in level 3, Khor Fakkan town site.





Thick layer of shell, Cblamys mobilis, Pit 19.



Deposit of Pit 19.



Fish bones, Chinese blue-and-white, Iranian green ware, shell from Pit 19.



Fish bones from Pit 19.



Shell, fish bones and earthenware from Pit 19.



Shell and fish bones from Pits 19.

Figure 72 Pit 19 at the open space in level 3, Khor Fakkan town site.



Pits 21 and 22.



Pits 21 and 22.



Pit 23.



Pits 23.



Pit 24.



Pit 25.

Figure 73 Pits 21, 22, 23, 24 and 25 at the open space in level 3, Khor Fakkan town site.



Pit 27.



Pit 27.



Pit 29.



Fish bones and stones from Pit 29.



Fish bones from Pit 29.



Pit 30.

Figure 74 Pits 27, 29 and 30 at the open space in level 3, Khor Fakkan town site.



Pits 31, 32 and 33.



Pits 31, 32 and 33.



Pit 34.



Pit 35.



Pit 36.



Pit 37.

Figure 75 Pits 31, 32, 33, 34, 35, 36 and 37 at the open space in level 3, Khor Fakkan town site.



Pit 38.



Myanmar green ware dish, earthenware and fish bones from Pit 38.



Pits 40 and 39 from left to right.



Pit 41.



Pit 42.



Pit 46.

Figure 76 Pits 38, 40, 41, 42 and 46 at the open space in level 3, Khor Fakkan town site.



Pits 47, ? and ?.



Pit 48.



Pits 48 and 39.



Thin sand layers with ashes and fish, Pit 48.



Fish skin from Pit 48.



Fish skin was collected and stored in Dibba dig house.

Figure 77 Pits 47 and 48 at the open space in level 3, Khor Fakkan town site.



Pit 49.



Pit 50.



Pits 52, 51 and 53.



Yemeni yellow glazed wae painted black from Pits 52.



Pit 53.



Pit 54.

Figure 78 Pits 49, 50, 51, 52, 53 and 54 at the open space in level 3, Khor Fakkan town site.



Pit 55.



Pit 56.



Pits 59 and 60.



Pits 61 and 62.



Pit 61 and 62.



Pit 61.

Figure 79 Pits 55, 56, 59, 60, 61 and 62 at the open space in level 3, Khor Fakkan town site.





Pit 61.



Pit 62.



Pit 62.



Pit 63.



Pit 64.



Pit 67, 66 and 65.

Figure 80 Pits 61, 62, 63, 64, 65, 66 and 67 at the open space in level 3, Khor Fakkan town site.



Pit 68.



Pit 69.



Pit 71.



Finds from Pit 71.



Earthenware from Pit 71.



Shell from Pit 71.

Figure 81 Pits 68, 69 and 71 at the open space in level 3, Khor Fakkan town site.



Pit 72.



Pit 72.



Pit 73.



Pit 75.



Pit 80.



Pit 84.

Figure 82 Pits 72, 73, 75, 80 and 84 at the open space in level 3, Khor Fakkan town site.



Pits 84.



Pit 85.



Pit 87.



Pit 87.



Pit 88.



Pit 88.

Figure 83 Pits 84, 85, 87 and 88 at the open space in level 3, Khor Fakkan town site.



Pits 89 and other ash pits.



Pit 90.



Pit 90.



Pit 91.



Pit 92.



Pit 93.

Figure 84 Pits 89, 90, 91, 92 and 93 at the open space in level 3, Khor Fakkan town site.



Pits 93.



A pearl oyster from Pit 93.



Pit 97.



Pit 99.



Pit 100.



Pit 101.

Figure 85 Pits 93, 97, 99, 100 and 101 at the open space in level 3, Khor Fakkan town site.



Pits 103.



Pit 104.



Pit 105.



Pit 106.



Pit 108.



Pit 109.

Figure 86 Pits 103, 104, 105, 106, 108 and 109 at the open space in level 3, Khor Fakkan town site.



Pit 110 and other ash pits.



Pit 115.



Pit 117.



Pit 118.

Figure 87 Pits 110, 115, 117 and 108 at the open space in level 3, Khor Fakkan town site.



Figure 88 Shell from lowest part of Level 3.





4.8g

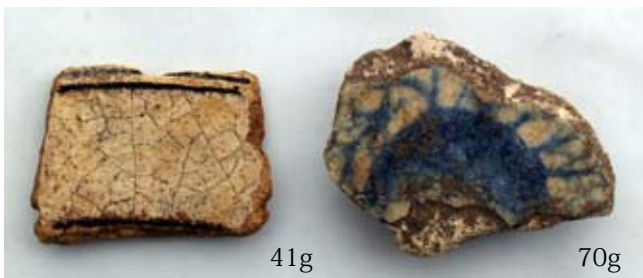
KFN.T613. Glass stick. 4.8g. Level 3.



KFN.T612. Vietnamese blue-and-white, bowl. 6g. Level 3.



Ceramic samples from sand layer excavated together in same place, Level 3.



41g

70g



KFN.T619. Moulded earthenware, flask. Found at gray sand layer. Level 3.



Transparent glazed ware painted black, bowl, 41g. Blue-and-white bowl, 70g. Found at south-east of House 2. Level 3.

Figure 89 Finds from gray sand layer at the open space, Level 3, Khor Fakkan town site.



Green glazed ware, bowls, Iran, Level 3.



Moulded ware, flask, Level 3.



Earthenware bowl, Level 3.

White opaque glazed ware, bowl, with cobalt blue lines, Level 3.



Earthenware vases, incised design, Level 3.

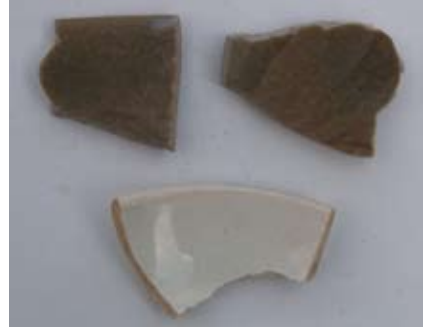
Transparent glazed ware with blue design, bowl, Level 3.



Figure 90 Finds from gray sand layer at the open space, Level 3, Khor Fakkan town site.



Chinese blue-and-white porcelain bowl, Level 3.



Chinese white porcelain bowl, Level 3.



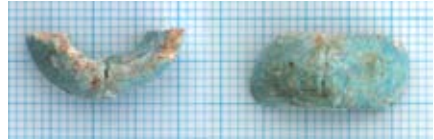
Chinese green ware bowls, Chinese white ware bowl, Level 3.



Stone mortar, Level 3.



Silver coin, found outside of Hearth 5 in sand.



Clay bead with blue glaze, outside of Hearth 5 in sand.



Bronze finger ring, Level 3.



Cblamys mobilis with artificial holes, Level 3.



Disk with holes, made by a base of opaque white glazed bowl.

Figure 91 Finds from gray sand layer at the open space, Level 3, Khor Fakkan town site.



Bronze coins, bronze khor sticks, bronze spoon, bronze finger rings, glass bangles, glass khor sticks, glass vessels, arnerian beads, glass blue, yellow, black beads, coral beads, carnerian ore, ostrich egg shell.

Figure 92 Finds from gray sand layer at the open space, Level 3, Khor Fakkan town site.



Same kind of shell, *Cblamys mobilis* were deposited in the lower part of Level 3.



Fish bones from gray sand layer, Level 3.



Shell of Cuttlefish from gray sand layer, Level 3.



Animal bones from gray sand layer, Level 3.



Shell from gray sand layer, Level 3.



Oyster from gray sand layer, Level 3.

Figure 93 Finds from gray sand layer at the open space, Level 3, Khor Fakkan town site.